

茨木市次世代育成支援に関するニーズ調査
結果報告書（案）
（19～39 歳）

令和6（2024）年3月
茨 木 市

目 次

I	調査の概要.....	1
1.	調査の目的.....	1
2.	調査概要.....	1
3.	配布・回収結果.....	1
4.	報告書の見方.....	1
II	調査結果.....	2
1.	本人や家族のことについて.....	2
2.	日ごろの意識と生活について.....	7
3.	困難な経験について.....	26
4.	相談窓口・相談機関等について.....	37
5.	地域の活動や子育てを支援する活動について.....	40
6.	茨木市での暮らしや意見について.....	42
III	調査結果からみえてきた今後の課題.....	46
1.	相談窓口・相談機関の周知.....	46
2.	多様な相談方法・相談機能の充実.....	46
3.	ヤングケアラー支援を進めるための相談機能の充実.....	46
4.	ひきこもりの長期化を防ぐための包括的な支援の充実.....	47
5.	孤独・孤立を解消する居場所の確保・提供.....	47

I 調査の概要

1. 調査の目的

現行の「茨木市次世代育成支援行動計画（第4期）」が令和6（2024）年度末で終了することから、こども基本法に基づく「こども計画」として、本市のこども・若者支援に関する施策を総合的・計画的に推進するための新たな計画となる「茨木市次世代育成支援行動計画（第5期）」（2025～2029年度）を策定することとしている。本調査は、新たな計画策定にあたって、本市の若者の日常生活や就労、社会参加等の状況や意見・要望などを把握することを目的に実施した。

2. 調査概要

- （1）調査地域 茨木市全域
- （2）調査対象 19歳～39歳の若者
- （3）対象者数 住民基本台帳から2,000人を無作為抽出
- （4）調査方法 郵送配布－郵送・WEB（併用）回収
- （5）調査期間 令和5（2023）年10月25日（水）～令和5（2023）年11月20日（月）
（調査期間内にお礼状兼督促状を1回送付）

3. 配布・回収結果

配布数	有効回収数			有効回収率
		郵送回答	WEB回答	
2,000	564	305	259	28.2%

4. 報告書の見方

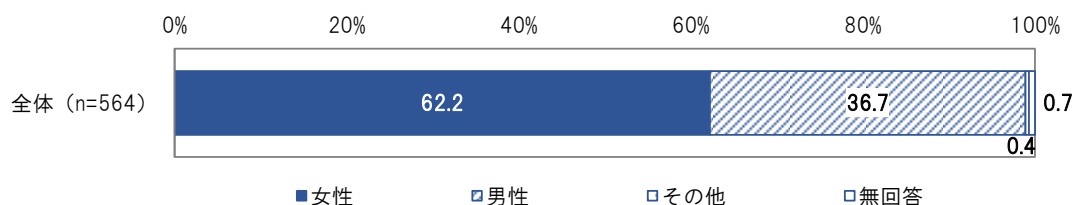
- グラフおよび表のn数（number of case）、「回答者数」は、有効標本数（集計対象者総数）を表す。
- 回答は各質問の回答者数（n）を基数とした百分率（％）で示してある。
- 百分率は小数点以下第2位を四捨五入して算出している。このため、百分率の合計が100%にならないことがある。
- 1つの質問に2つ以上答えられる“複数回答可能”の場合は、回答比率の合計が100%を超える場合がある。
- グラフ等の記載にあたっては、調査票の選択肢の文言を一部省略している場合がある。
- 性別、年代別等のクロス集計表については、無回答やその他を除いて、1番目に割合の高い回答を「太字＋濃い網掛け」とし、2番目に割合の高い回答を「薄い網掛け」としている。なお、割合が同じ回答が複数ある場合は、3項目以上に網掛けをしている場合がある。

Ⅱ 調査結果

1. 本人や家族のことについて

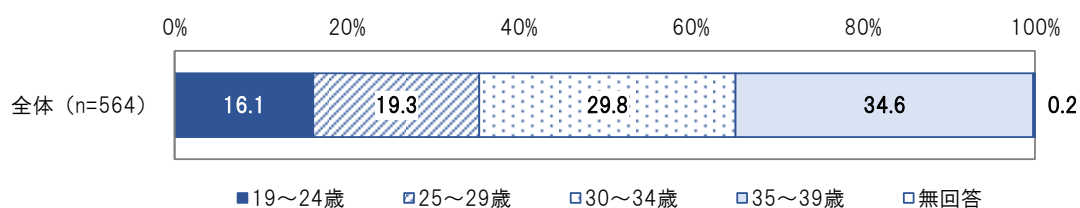
(1) 性別【問1 単数回答】

○性別は、「女性」が62.2%、「男性」が36.7%となっている。



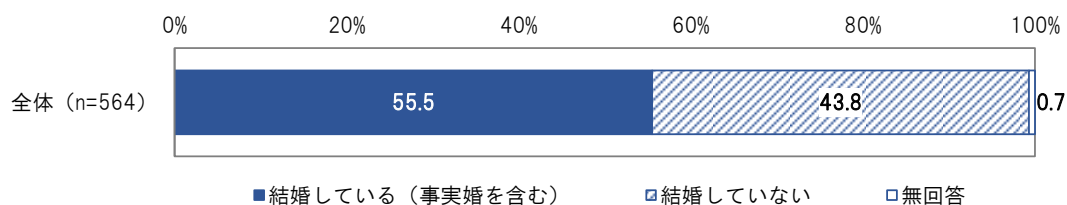
(2) 年齢【問2 単数回答】

○年齢は、「35～39 歳」が34.6%と最も高く、次いで「30～34 歳」が29.8%、「25～29 歳」が19.3%、「19～24 歳」が16.1%となっている。



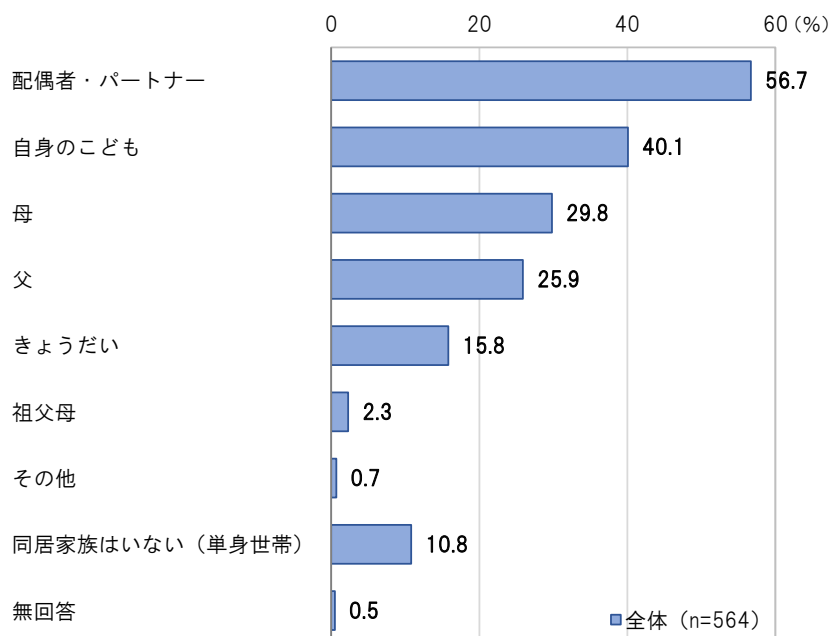
(3) 結婚の有無【問3 単数回答】

○結婚の有無は、「結婚している（事実婚を含む）」が55.5%、「結婚していない」が43.8%となっている。



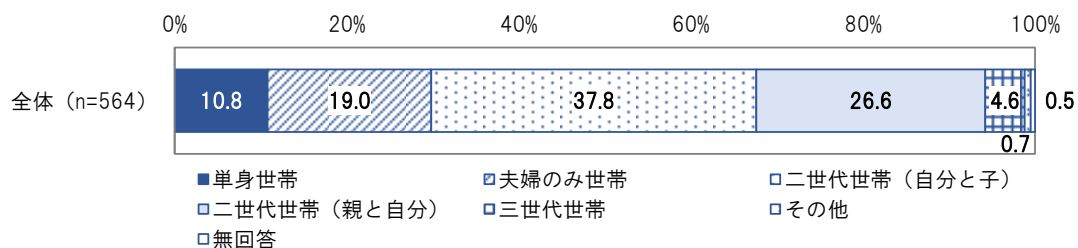
(4) 同居家族【問4 複数回答】

○同居家族は、「配偶者・パートナー」が56.7%と最も高く、次いで「自身のこども」(40.1%)、「母」(29.8%)、「父」(25.9%)となっている。



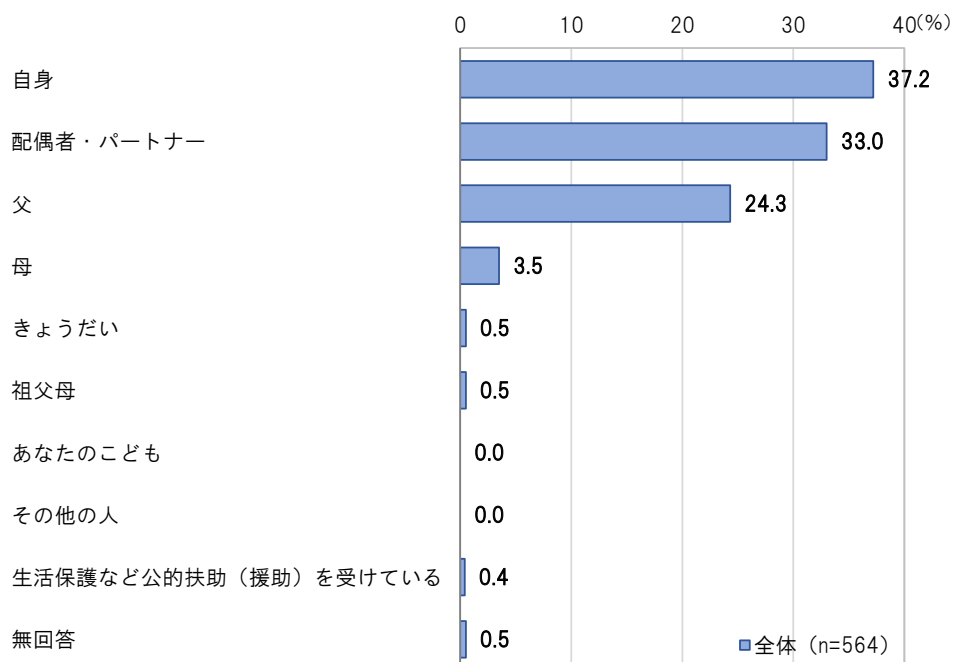
《家族形態集計》

○家族形態は、「二世世代世帯（自分と子）」が37.8%と最も多く、次いで「二世世代世帯（親と自分）」(26.6%)、「夫婦のみ世帯」(19.0%)、「単身世帯」(10.8%)となっている。



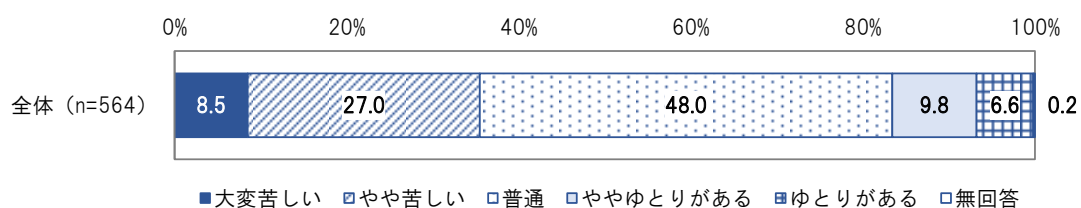
(5) 主に生計を立てている人【問5 単数回答】

○主に生計を立てている人は、「自身」が37.2%と最も高く、次いで「配偶者・パートナー」(33.0%)、「父」(24.3%)、「母」(3.5%)となっている。



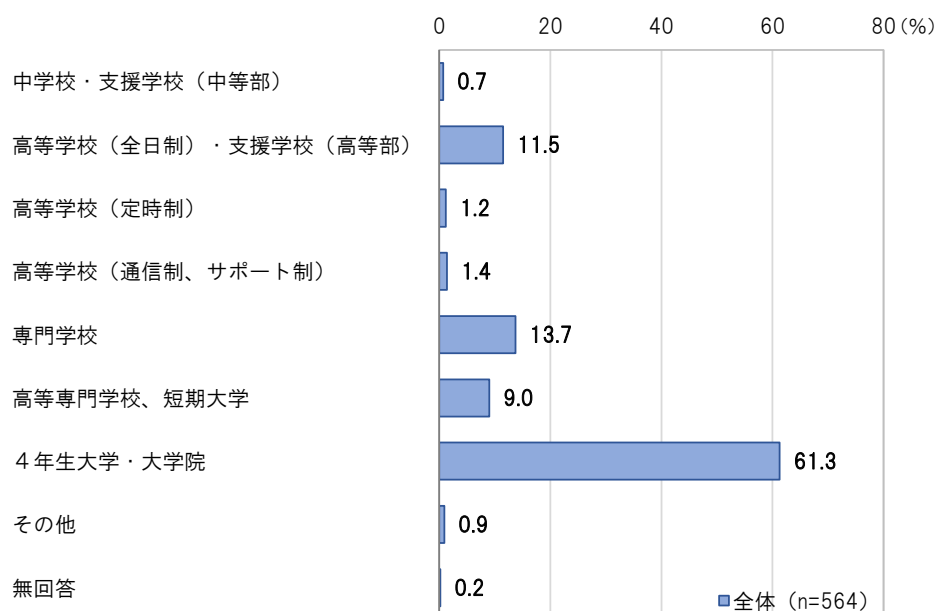
(6) 暮らしの状況【問6 単数回答】

○暮らしの状況は、「普通」が48.0%と最も高く、次いで「やや苦しい」が27.0%となっており、「大変苦しい」(8.5%)と合わせた『苦しい』が3割以上を占めている。



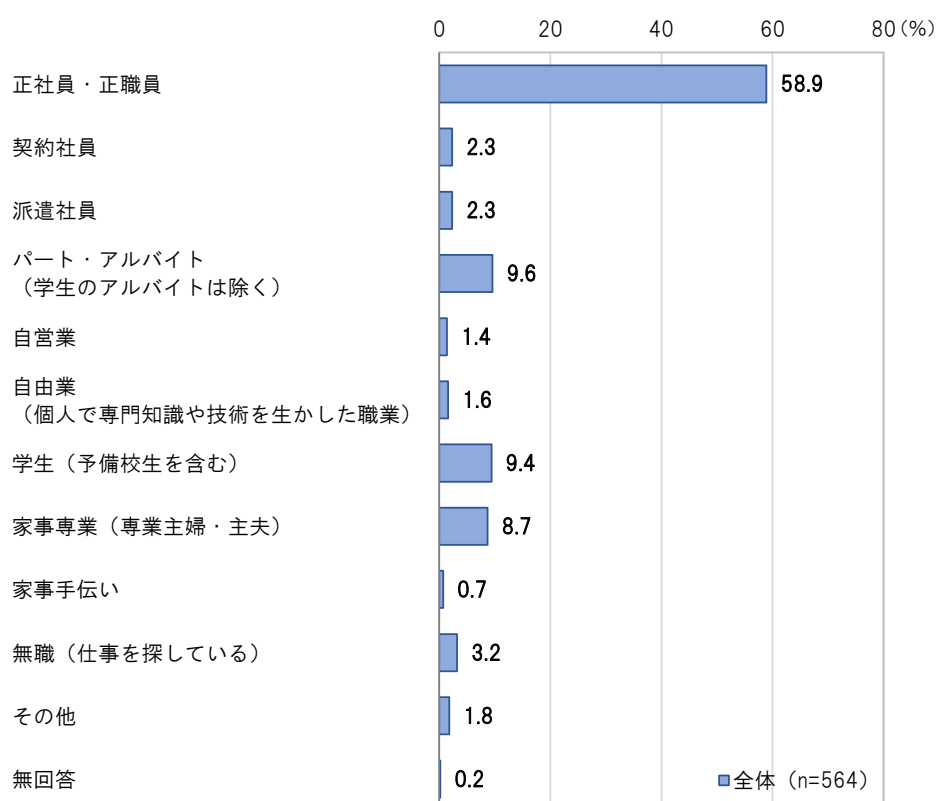
（７）最後に在学していた（現在在学している）学校【問７ 単数回答】

○最後に在学していた（現在在学している）学校は、「４年生大学・大学院」が61.3%と最も高く、次いで「専門学校」（13.7%）、「高等学校（全日制）・支援学校（高等部）」（11.5%）、「高等専門学校、短期大学」（9.0%）となっている。



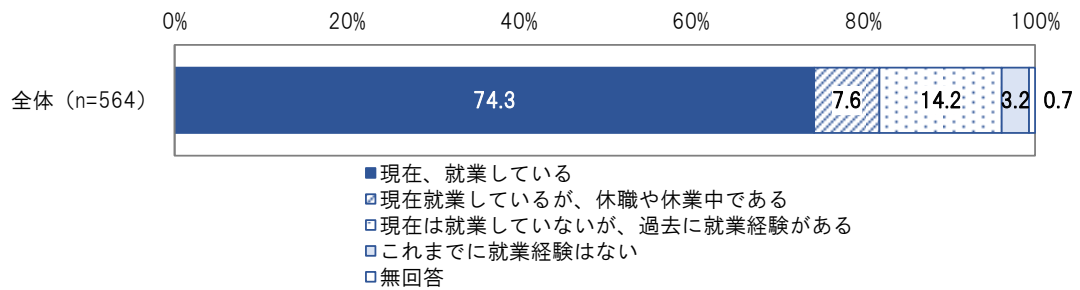
（８）現在の職業【問８ 単数回答】

○現在の職業は、「正社員・正職員」が58.9%と最も高く、次いで「パート・アルバイト（学生のアルバイトは除く）」（9.6%）、「学生（予備校生を含む）」（9.4%）となっている。



(9) 就業経験【問9 単数回答】

○就業経験は、「現在、就業している」が74.3%と最も高く、次いで「現在は就業していないが、過去に就業経験がある」(14.2%)、「現在就業しているが、休職や休業中である」(7.6%)となっている。

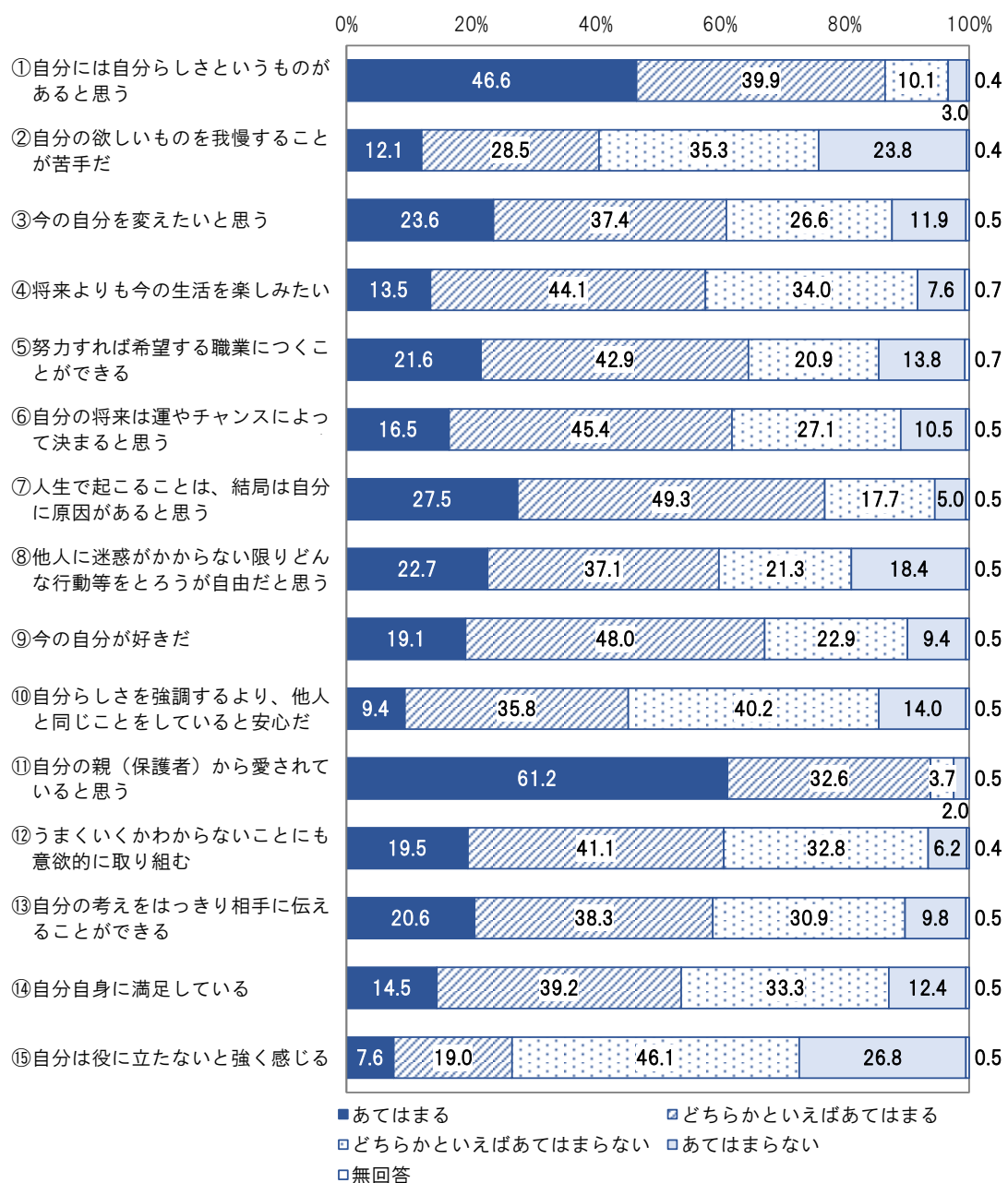


2. 日ごろの意識と生活について

(1) 自身についてあてはまること【問10 単数回答】

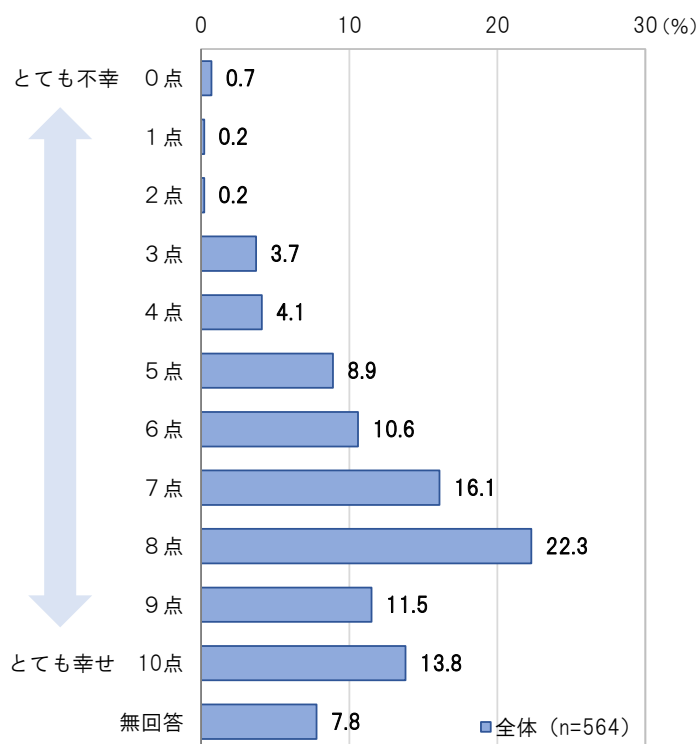
○自身についてあてはまることでは、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」を合わせた『あてはまる』の割合をみると、“⑪自分の親（保護者）から愛されていると思う”で93.8%と最も高く、次いで“①自分には自分らしさというものがあると思う”（86.5%）、“⑦人生で起こることは、結局は自分に原因があると思う”（76.8%）となっている。

○「どちらかといえばあてはまらない」と「あてはまらない」を合わせた『あてはまらない』の割合をみると、“⑤自分は役に立たないと強く感じる”で72.9%と最も高く、次いで“②自分の欲しいものを我慢することが苦手だ”（59.1%）、“⑩自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていると安心だ”（54.2%）となっている。



(2) 幸福感【問 11 単数回答】

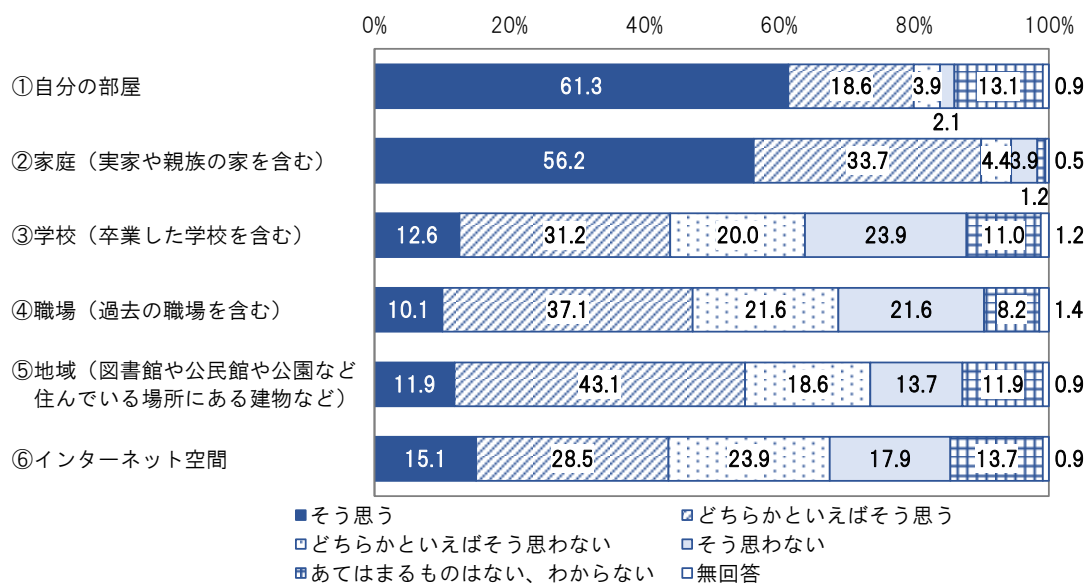
○幸福感は、「8点」が22.3%と最も高く、次いで「7点」(16.1%)、「10点」(13.8%)となっており、平均点は7.27点となっている。



(3) 居場所【問 12 単数回答】

○居場所については、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた『そう思う』の割合をみると、“②家庭（実家や親族の家を含む）”で89.9%と最も高く、次いで“①自分の部屋”（79.9%）となっている。

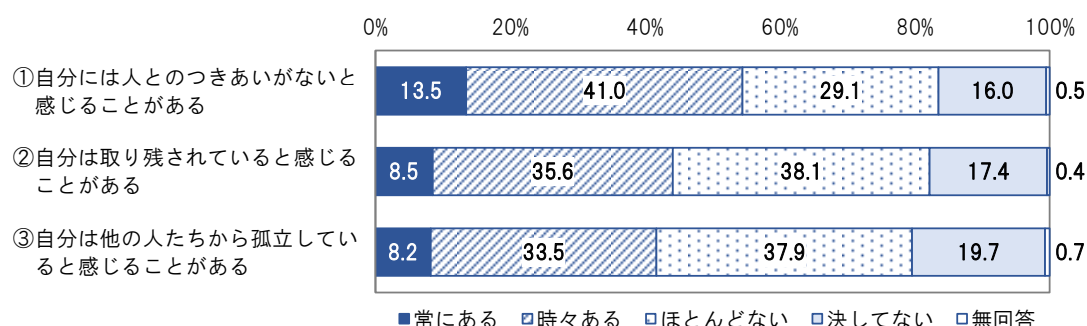
○「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を合わせた『そう思わない』の割合をみると、“③学校（卒業した学校を含む）”、“④職場（過去の職場を含む）”、“⑥インターネット空間”で4割を超えている。



（４）孤独・孤立について感じる事【問 13 単数回答】

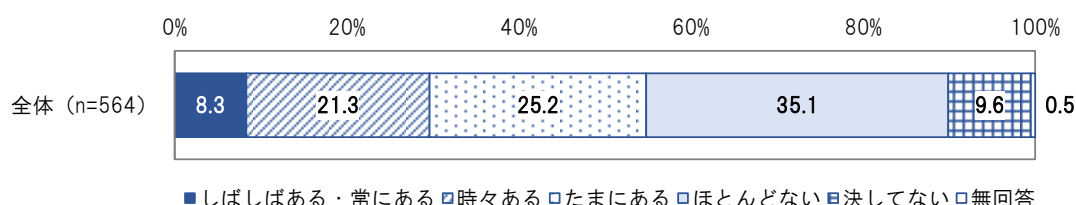
○孤独・孤立について感じる事では、「常にある」と「時々ある」を合わせた『ある』の割合をみると、“①自分には人とのつきあいが無いと感じることがある”で54.5%と最も高く、次いで“②自分は取り残されていると感じることがある”（44.1%）、“③自分は他の人たちから孤立していると感じることがある”（41.7%）となっている。

○「ほとんどない」と「決してない」を合わせた『ない』の割合をみると、“②自分は取り残されていると感じることがある”、“③自分は他の人たちから孤立していると感じることがある”では半数を超えている。



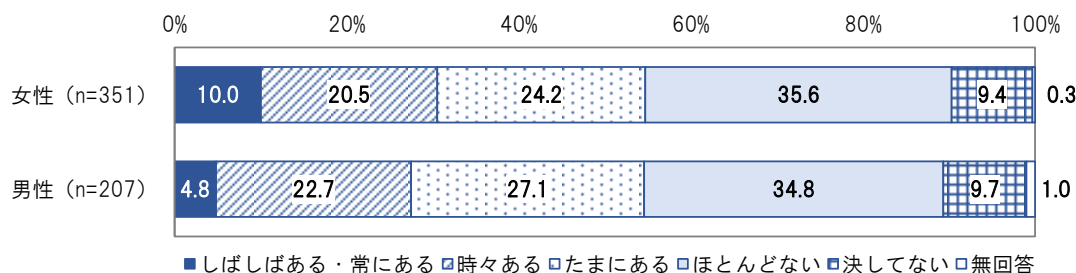
（５）孤独であると感じることの有無【問 14 単数回答】

○孤独であると感じることの有無は、「ほとんどない」が35.1%と最も高くなっているものの、次いで「たまにある」（25.2%）、「時々ある」（21.3%）となっており、「しばしばある・常にある」（8.3%）と合わせると、『ある』が半数以上を占めている。



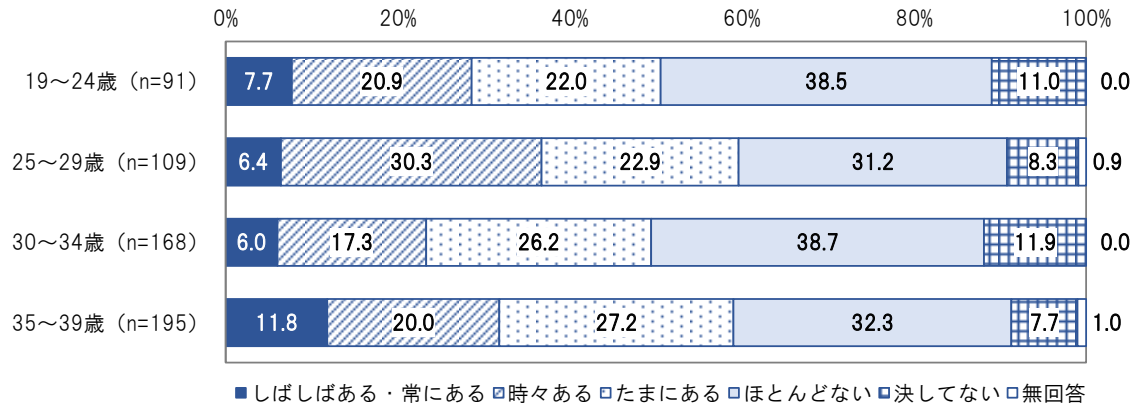
《性別比較》

○性別にみると、「しばしばある・常にある」が[男性]に比べて[女性]でやや高くなっているものの、『ある』の割合では大きな差異はみられない。



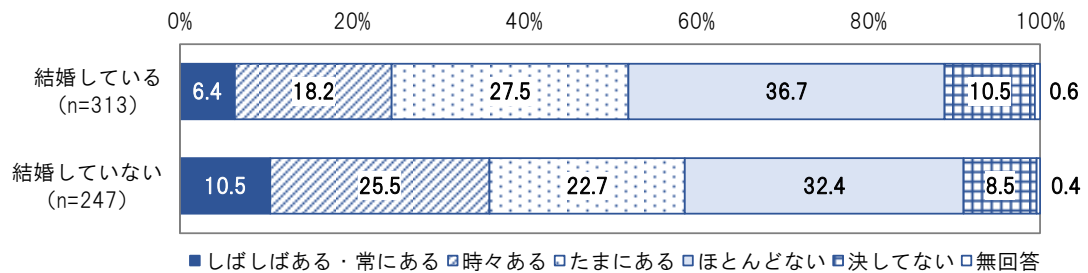
《年代別比較》

○年代別にみると、『ある』の割合が[25～29歳][35～39歳]で約6割を占め、その他の年代に比べて高くなっている。



《結婚の有無別比較》

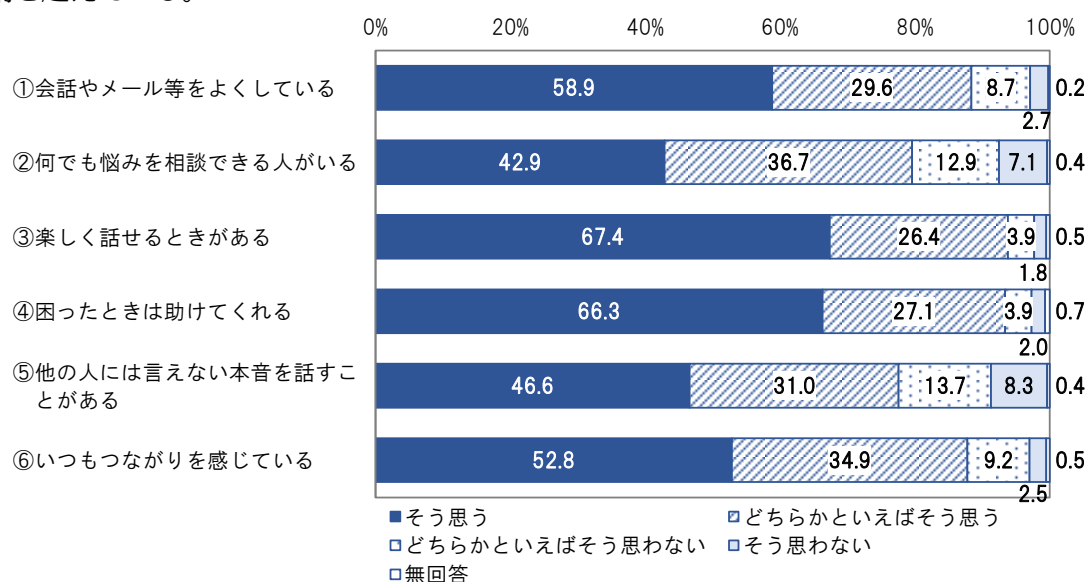
○結婚の有無別にみると、『ある』の割合は[結婚していない]では6割近くを占め、[結婚している]を上回っている。



（６）家族・親族とのかかわり【問 15 単数回答】

○家族・親族とのかかわりは、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた『そう思う』の割合をみると、“③楽しく話せるときがある”で 93.8%と最も高く、次いで“④困ったときは助けてくれる”（93.4%）となっている。

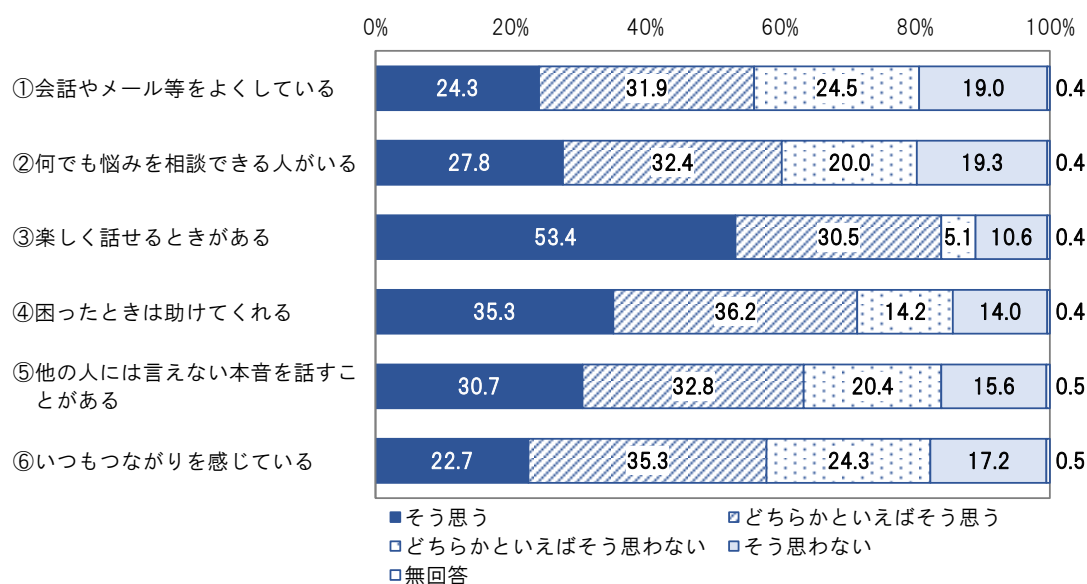
○「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を合わせた『そう思わない』の割合をみると、“②何でも悩みを相談できる人がある”、“⑤他の人には言えない本音を話すことがある”で 2 割を超えている。



（７）学校で出会った友人とのかかわり【問 16 単数回答】

○学校で出会った友人とのかかわりは、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた『そう思う』の割合をみると、“③楽しく話せるときがある”で 83.9%と最も高く、次いで“④困ったときは助けてくれる”（71.5%）となっている。

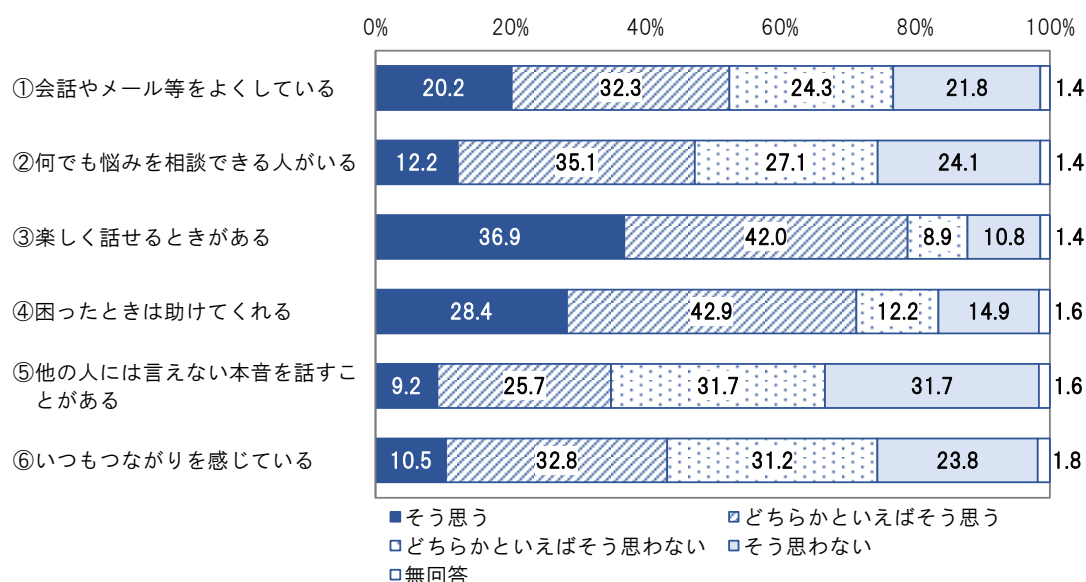
○「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を合わせた『そう思わない』の割合をみると、“①会話やメール等をよくしている”、“⑥いつもつながりを感じている”で 4 割を超えている。



(8) 職場・アルバイト関係の人とのかかわり【問 17 単数回答】

○職場・アルバイト関係の人とのかかわりは、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた『そう思う』の割合をみると、“③楽しく話せるときがある”で78.9%と最も高く、次いで“④困ったときは助けてくれる”(71.3%)となっている。

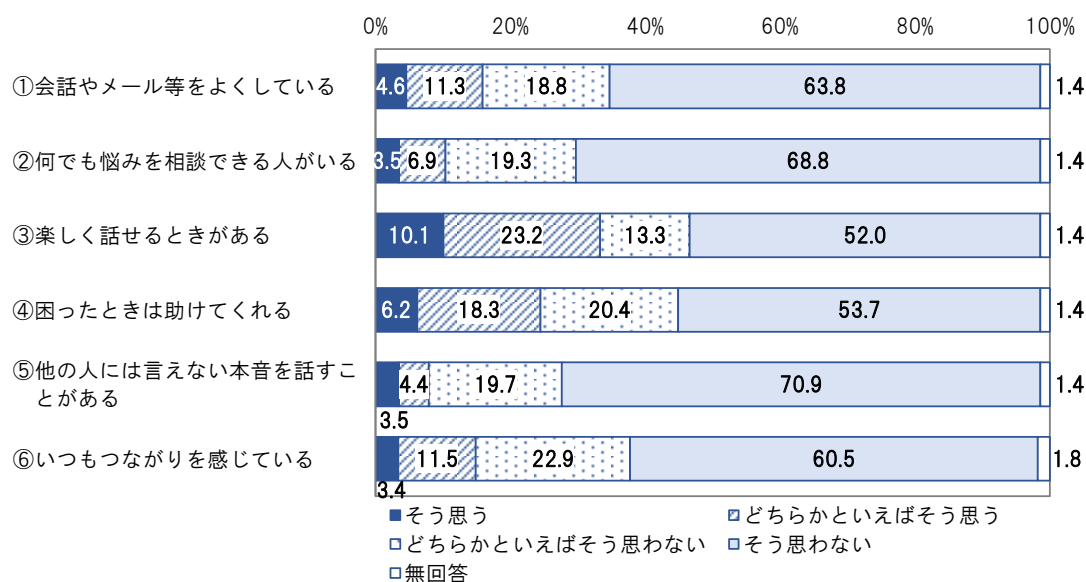
○「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を合わせた『そう思わない』の割合をみると、“⑤他の人には言えない本音を話すことがある”で6割を超えて高くなっている。



(9) 地域の人とのかかわり【問 18 単数回答】

○地域の人とのかかわりは、すべての項目で「そう思わない」が最も高く、「どちらかといえばそう思わない」と合わせた『そう思わない』の割合をみると、“⑤他の人には言えない本音を話すことがある”で90.6%と最も高く、次いで“②何でも悩みを相談できる人がいる”(88.1%)となっている。

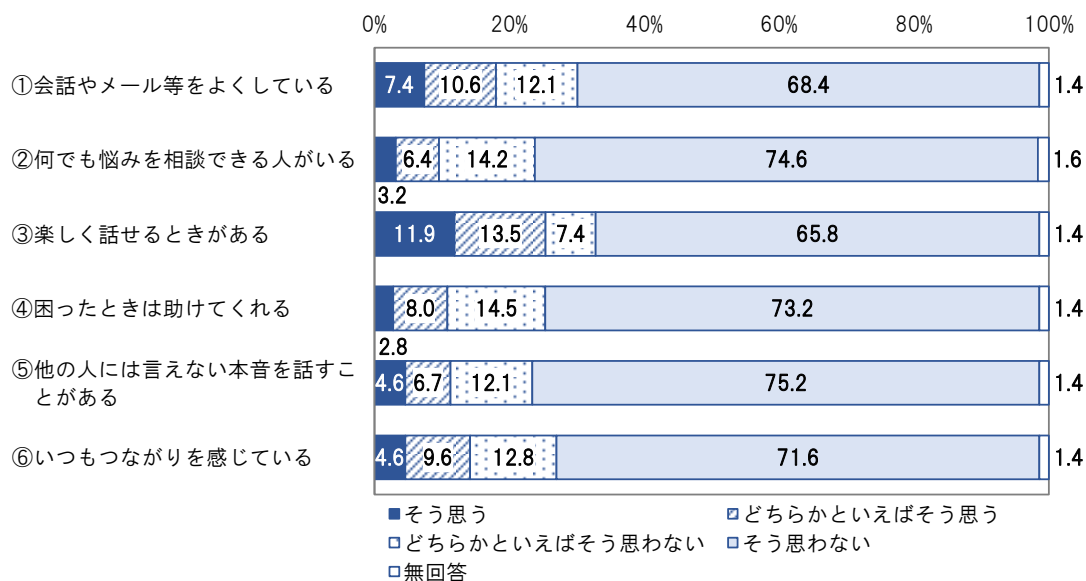
○「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた『そう思う』の割合をみると、“③楽しく話せるときがある”が3割以上を占めている。



(10) インターネット上における人やグループとのかかわり【問 19 単数回答】

○インターネット上における人やグループとのかかわりは、すべての項目で「そう思わない」が最も高く、「どちらかといえばそう思わない」と合わせた『そう思わない』の割合をみると、“②何でも悩みを相談できる人がある”で 88.8%と最も高く、次いで“④困ったときは助けてくれる”（87.7%）、“⑤他の人には言えない本音を話すことがある”（87.3%）となっている。

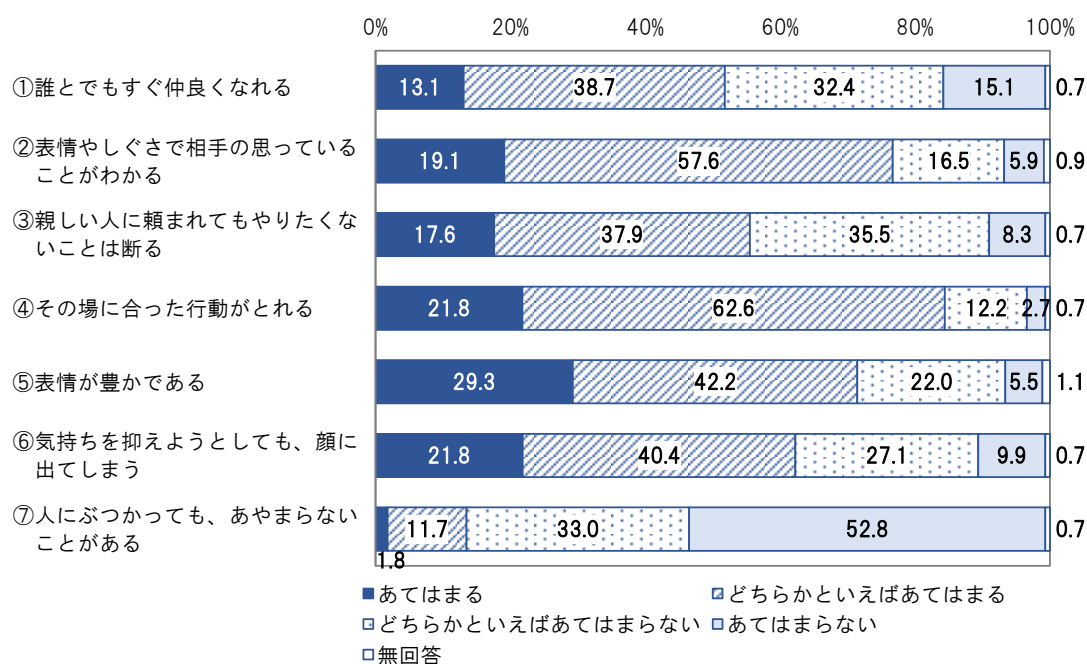
○「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた『そう思う』の割合をみると、“③楽しく話せるときがある”が2割以上を占めている。



(11) 他の人との付き合い方について【問 20 単数回答】

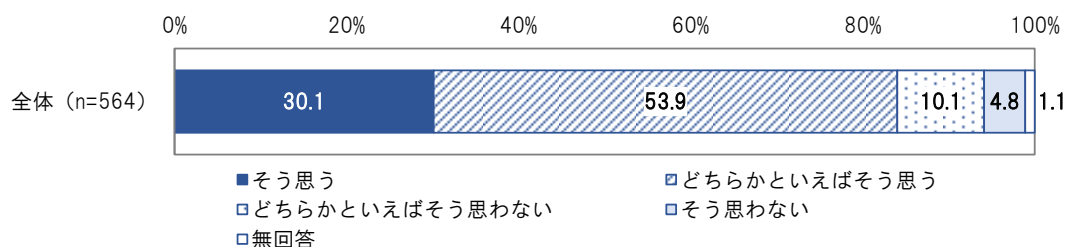
○他の人との付き合い方については、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」を合わせた『あてはまる』の割合をみると、“④その場に合った行動がとれる”で 84.4%と最も高く、次いで“②表情やしぐさで相手の思っていることがわかる”(76.7%)、“⑤表情が豊かである”(71.5%)となっている。

○「どちらかといえばあてはまらない」と「あてはまらない」を合わせた『あてはまらない』の割合をみると、“⑦人にぶつかっても、あやまらないことがある”で 85.8%と最も高く、次いで“①誰とでもすぐ仲良くなれる”(47.5%)、“③親しい人に頼まれてもやりたくないことは断る”(43.8%)となっている。



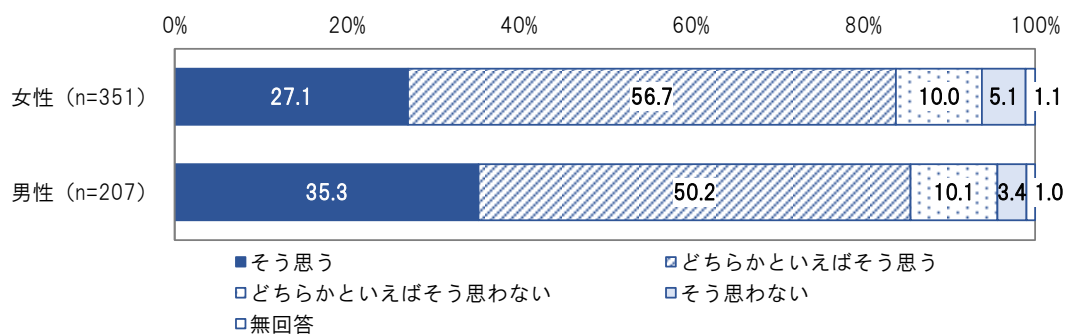
(12)「社会のために役立つことをしたい」と思うか【問 21 単数回答】

○社会のために役立つことをしたいと思うかでは、「どちらかといえばそう思う」が 53.9%と最も高く、「そう思う」(30.1%)と合わせると、『そう思う』が8割以上を占めている。



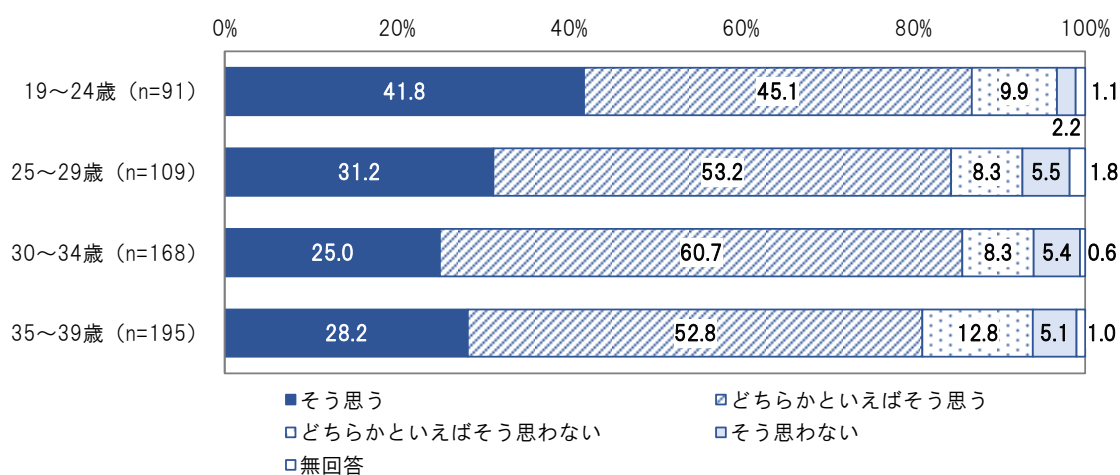
《性別比較》

○性別にみると、「そう思う」が[女性]に比べて[男性]で高くなっているものの、「どちらかといえばそう思う」と合わせた『そう思う』の割合では大きな差異はみられない。



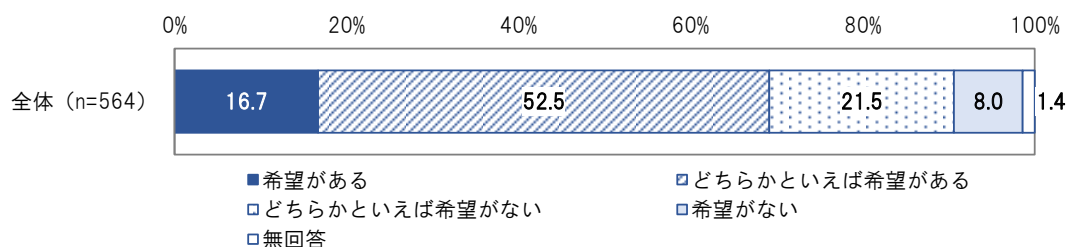
《年代別比較》

○年代別にみると、「そう思う」の割合が[19～24 歳]で4割を超え、その他の年代に比べて高くなっている。



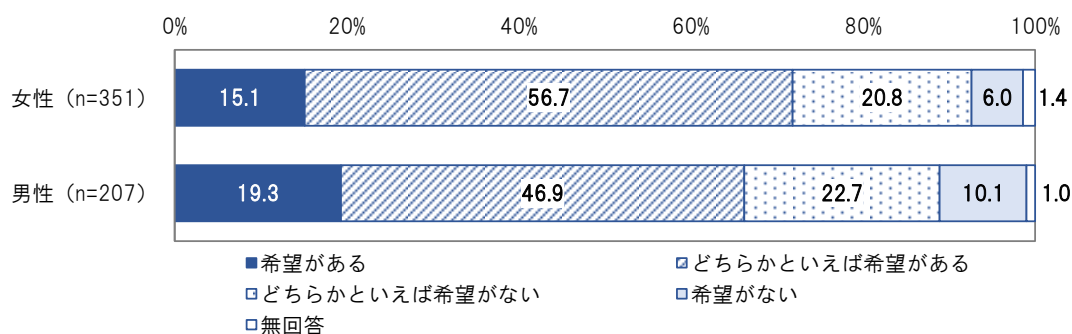
(13) 自分の将来に明るい希望を持っているか【問 22 単数回答】

- 社会のために役立つことをしたいと思うかでは、「どちらかといえば希望がある」が 52.5%と最も高く、「希望がある」(16.7%)と合わせると、『希望がある』が約7割を占めている。
- 「どちらかといえば希望がない」(21.5%)と「希望がない」(8.0%)を合わせた『希望がない』は、約3割となっている。



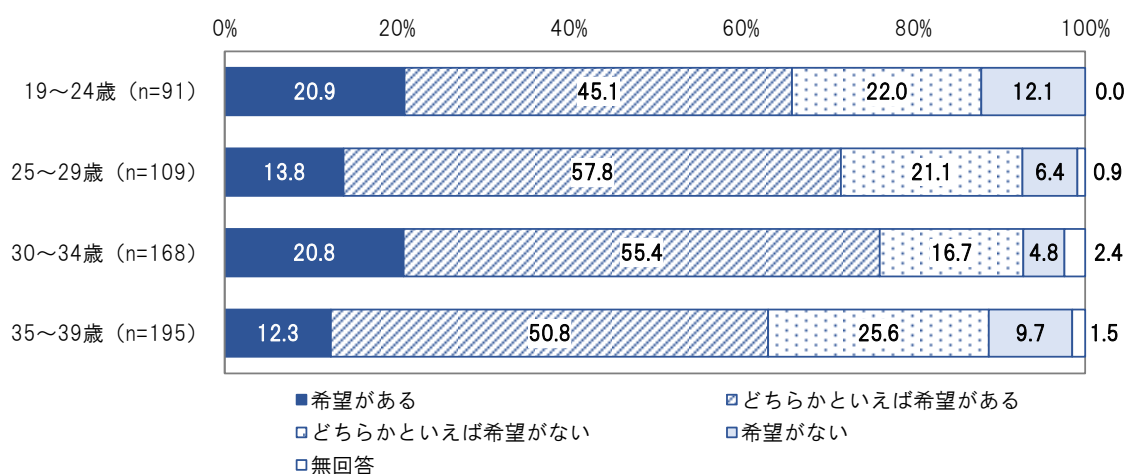
《性別比較》

- 性別にみると、『希望がある』の割合では[女性]に比べて[男性]で低くなっている。



《年代別比較》

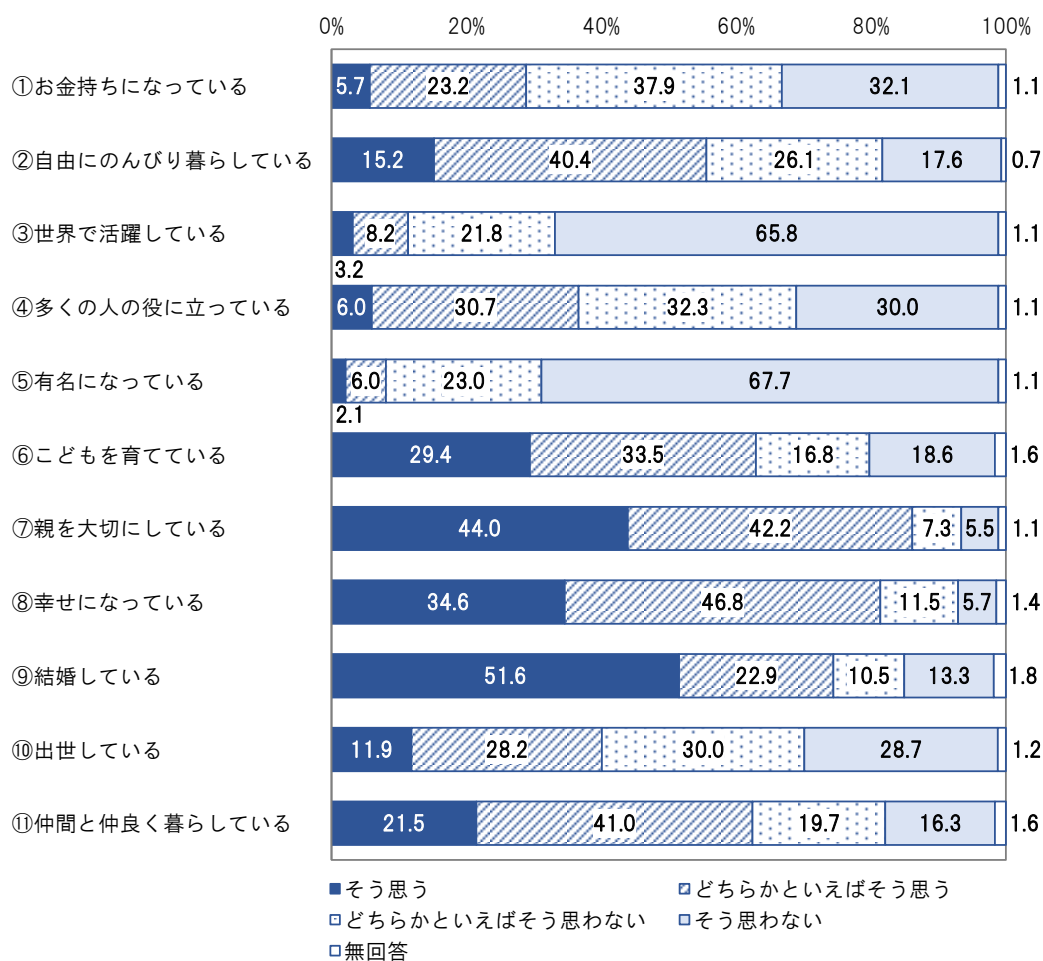
- 年代別にみると、『希望がある』の割合が[30～34歳]で76.2%と最も高く、次いで[25～29歳]が71.6%となっている。
- 『希望がない』の割合をみると、[19～24歳][35～39歳]で3割を超えて高くなっている。



(14) 20 年後の自身の姿【問 23 単数回答】

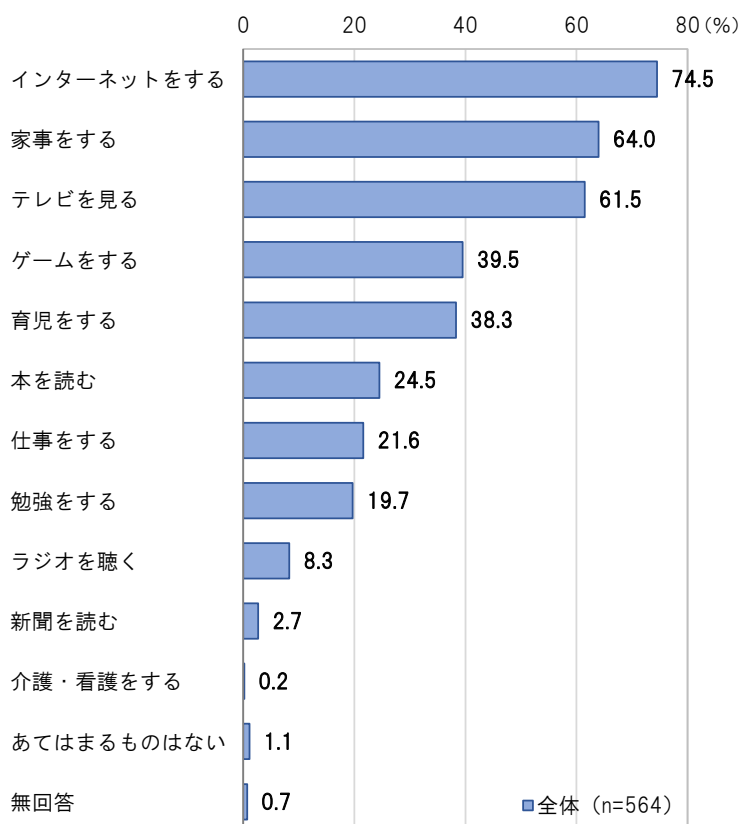
○20 年後の自身の姿について、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた『そう思う』の割合をみると、“⑦親を大切にしている”で 86.2%と最も高く、次いで“⑧幸せになっている”（81.4%）、“⑨結婚している”（74.5%）となっている。

○「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を合わせた『そう思わない』の割合をみると、“⑤有名になっている”で 90.7%と最も高く、次いで“③世界で活躍している”（87.6%）、“①お金持ちになっている”（70.0%）となっている。



(15) 自宅でよくしていること【問 24 複数回答】

○自宅でよくしていることは、「インターネットをする」が 74.5%と最も高く、次いで「家事をする」(64.0%)、「テレビを見る」(61.5%)となっている。



《性別比較》

○性別にみると、[女性]では「家事をする」、[男性]では「インターネットをする」が最も高くなっている。

○また、[女性]では、「家事をする」や「テレビを見る」、「育児をする」などで[男性]に比べて高く、[男性]では「ゲームをする」や「本を読む」、「仕事をする」などで[女性]に比べて高くなっている。

		(%)													
		回答者数（人）	インターネットをする	家事をする	テレビを見る	ゲームをする	育児をする	本を読む	仕事をする	勉強をする	ラジオを聴く	新聞を読む	介護・看護をする	あてはまるものはない	無回答
性別	女性	351	72.4	75.2	67.8	31.3	44.4	21.9	17.7	17.1	7.1	1.4	0.3	0.9	0.3
	男性	207	79.2	45.9	52.2	54.1	29.0	28.5	29.0	23.2	10.6	4.3	－	1.0	1.0

※1 番目に割合の高い回答を「太字+濃い網掛け」とし、2 番目に割合の高い回答を「薄い網掛け」としている。

《年代別比較》

○年代別にみると、[19～24 歳] [25～29 歳] では「インターネットをする」、[30～34 歳] [35～39 歳] では「家事をする」が最も高くなっている。

○また、年代が上がるにつれて「家事をする」や「育児をする」、「本を読む」などが高くなる傾向がみられる。

(%)

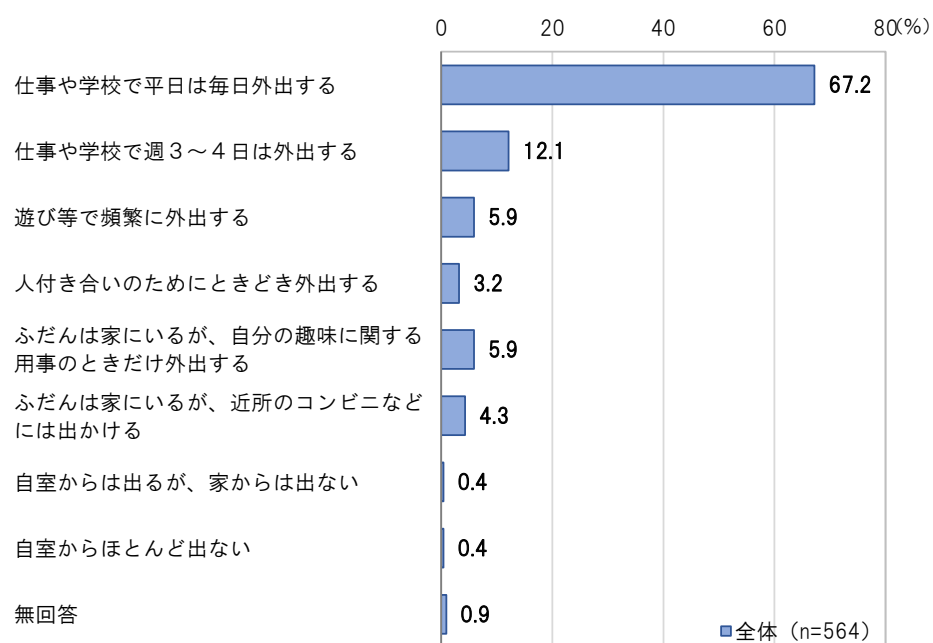
		回答者数(人)	インターネットをする	家事をする	テレビを見る	ゲームをする	育児をする	本を読む	仕事をする	勉強をする	ラジオを聴く	新聞を読む	介護・看護をする	あてはまるものはない	無回答
年代別	19～24歳	91	76.9	31.9	56.0	54.9	2.2	19.8	5.5	28.6	4.4	-	-	2.2	-
	25～29歳	109	85.3	63.3	61.5	48.6	13.8	22.9	21.1	25.7	15.6	1.8	0.9	0.9	0.9
	30～34歳	168	69.6	70.2	63.1	32.1	45.2	23.8	26.2	13.7	7.7	2.4	-	1.2	0.6
	35～39歳	195	71.8	74.4	63.1	33.8	63.1	28.2	25.6	16.9	6.7	4.6	-	0.5	1.0

※1 番目に割合の高い回答を「太字+濃い網掛け」とし、2 番目に割合の高い回答を「薄い網掛け」としている。

(16) 外出状況【問 25 単数回答】

○外出状況は、「仕事や学校で平日は毎日外出する」が 67.2%と最も高く、次いで「仕事や学校で週3～4日は外出する」(12.1%)、「遊び等で頻繁に外出する」(5.9%)となっており、『外出している』人が9割近くを占めている。

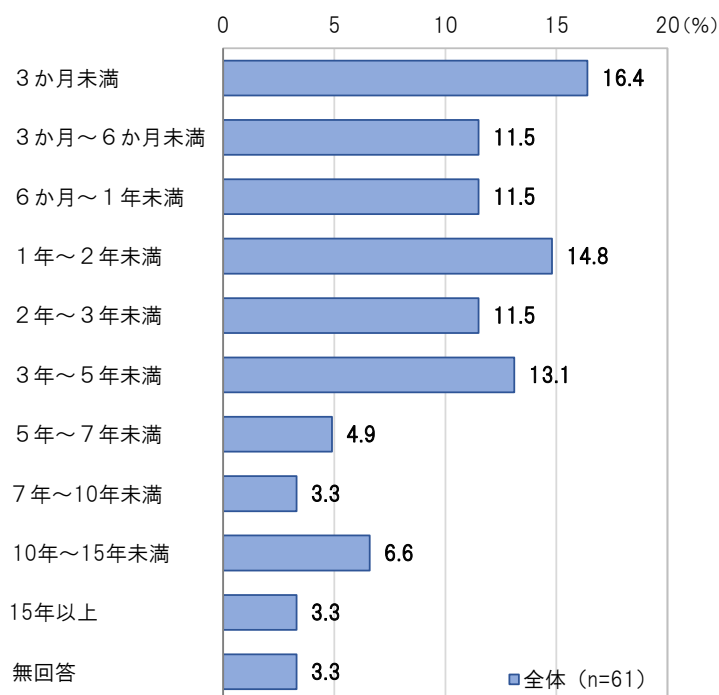
○「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」と「自室からは出るが、家からは出ない」、「自室からほとんど出ない」を合わせた『外出しない』人は5.1%となっている。



(16-1) 現在の外出状況となつてからの期間【問 25-1 単数回答】

※ (16) で「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」のいずれかを回答した人のみ

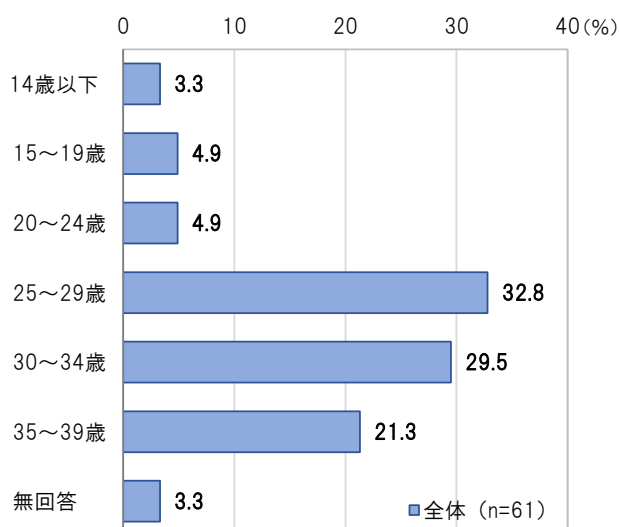
○現在の外出状況となつてからの期間は、「3 か月未満」が 16.4%と最も高くなっているものの、次いで「1 年～2 年未満」(14.8%)、「3 年～5 年未満」(13.1%)となっており、『6 か月以上』が約 7 割を占めている。



(16-2) 現在の外出状況となった年齢【問 25-2 単数回答】

※ (16) で「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」のいずれかを回答した人のみ

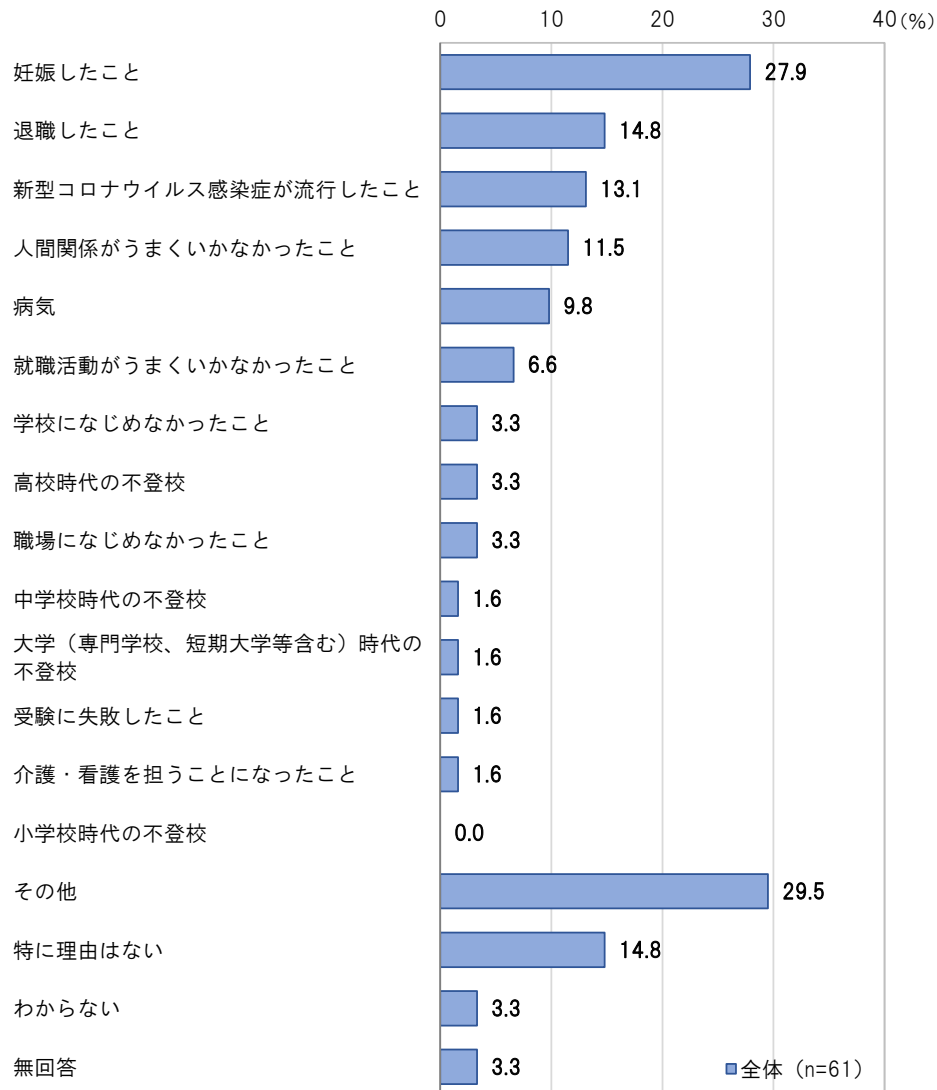
○現在の外出状況となった年齢は、「25～29 歳」が 32.8%と最も高く、次いで「30～34 歳」(29.5%)、「35～39 歳」(21.3%)となっており、『25 歳以上』から現在の外出状況となっている人が 8 割以上を占めている。



(16-3) 現在の外出状況となった主な理由【問 25-3 複数回答】

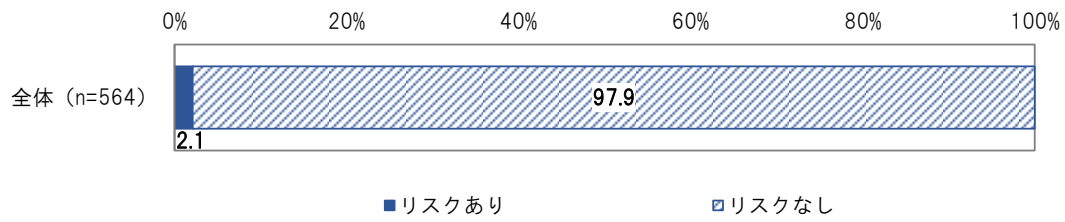
※ (16) で「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事するときだけ外出する」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」のいずれかを回答した人のみ

○現在の外出状況となった主な理由は、「妊娠したこと」が 27.9%と最も高く、次いで「退職したこと」(14.8%)、「新型コロナウイルス感染症が流行したこと」(13.1%)、「人間関係がうまくいかなかったこと」(11.5%)となっている。



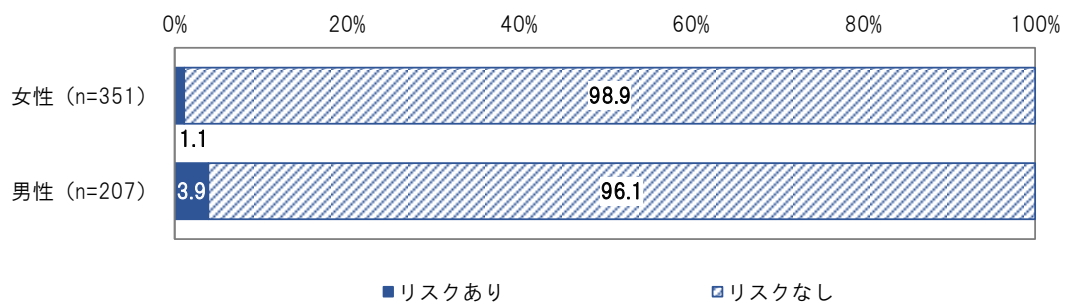
【ひきこもり傾向集計】

○ひきこもり傾向をみると、「(ひきこもりの) リスクあり」は2.1%となっている。



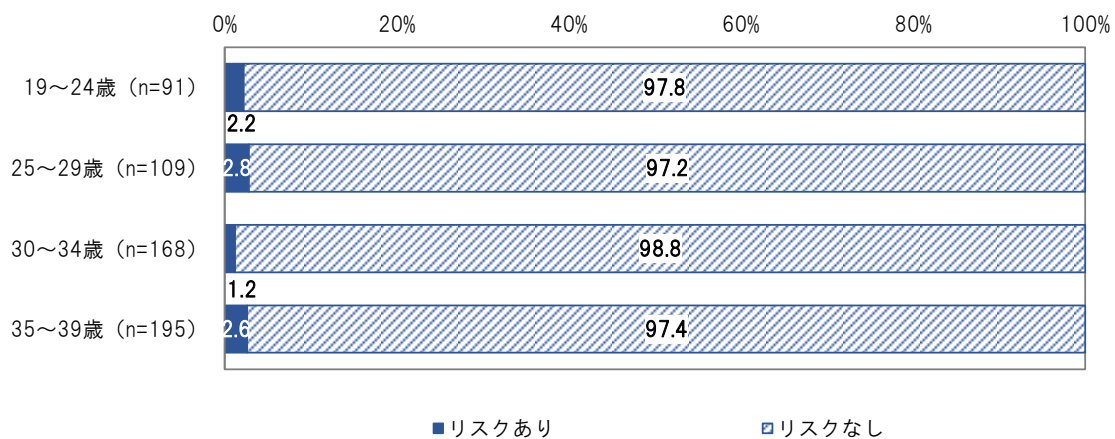
《性別比較》

○性別にみると、「リスクあり」の割合では[女性]に比べて[男性]でやや高くなっている。



《年代別比較》

○年代別にみると、「リスクあり」の割合が[30～34 歳]で1.2%と他の年代に比べて最も低くなっている。



【参考】ひきこもり傾向分類の考え方

内閣府が実施した「若者の生活に関する調査報告書（平成 28 年 9 月）」を参考に、以下のように整理。
本調査では、「広義のひきこもり群」「親和群」をまとめて『ひきこもり傾向群』とし、傾向を分析。

●ひきこもりの《リスクあり》

(16) 外出状況（問 25）で以下の項目を選択した人

- ・ ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のみときだけ外出する
- ・ ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける
- ・ 自室からは出るが、家からは出ない
- ・ 自室からほとんど出ない

かつ

(16-1) 現在の外出状況になってからの期間（問 25-1）で「6 か月以上」を選択した人

であって、以下の項目に該当する人を除く

(16-3) 現在の外出状況になった主な理由（問 25-3）で以下の項目を選択した人

- ・ 病気
- ・ 妊娠したこと
- ・ その他 ※カッコ内に自宅で仕事をしている旨や出産・育児をしている旨を記入した人

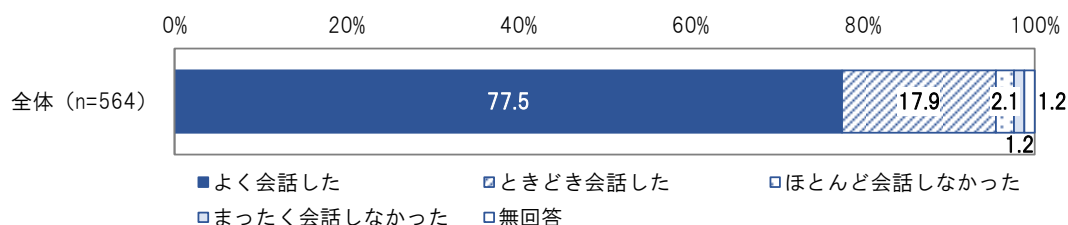
又は

(15) 自宅でよくしていること（問 24）で以下の項目を選択した人

- ・ 家事をする
- ・ 育児をする

(17) 家族以外との会話の有無【問 26 単数回答】

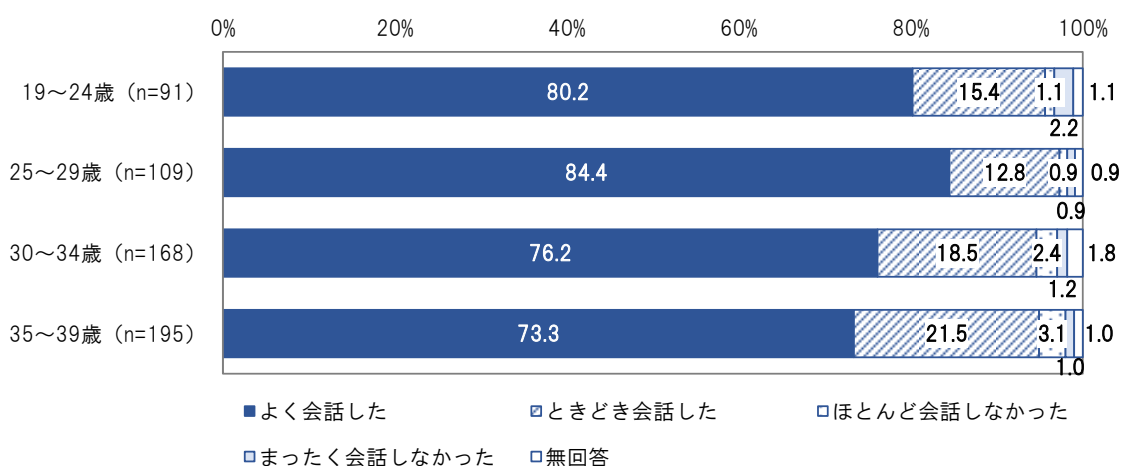
○家族以外との会話の有無は、「よく会話をした」が77.5%と最も高く、次いで「ときどき会話をした」(17.9%)となっており、『会話をした』人が9割以上を占めている。



《年代別比較》

○年代別にみると、「よく会話をした」の割合が[25～29歳]で84.4%と最も高く、次いで[19～24歳]で80.2%となっている。

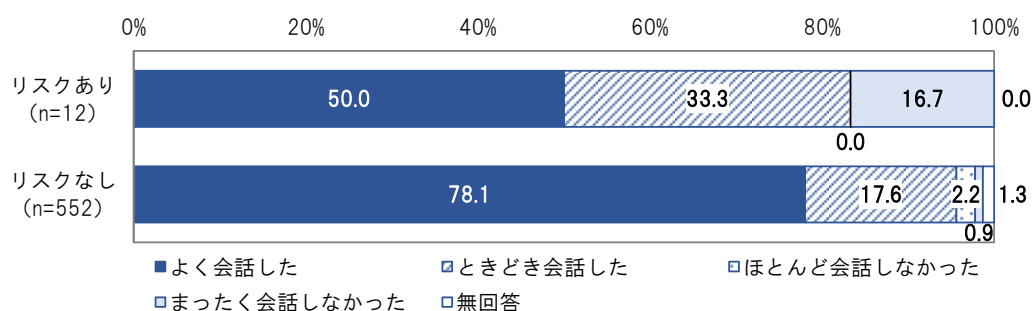
○「ほとんど会話をしなかった」と「まったく会話をしなかった」を合わせた『会話をしなかった』の割合では、[35～39歳]で4.1%と最も高くなっている。



《ひきこもり傾向別比較》

○ひきこもり傾向別にみると、「よく会話をした」の割合が[(ひきこもりの) リスクあり]で50.0%と、[(ひきこもりの) リスクなし] (78.1%)を大きく下回っている。

○また、『会話をしなかった』の割合では、[(ひきこもりの) リスクあり]で16.7%と高くなっている。

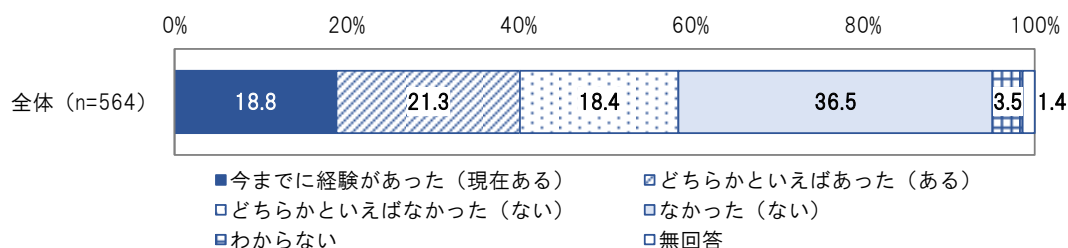


3. 困難な経験について

(1) 社会・日常生活を円滑に送れなかったことの有無【問 27 単数回答】

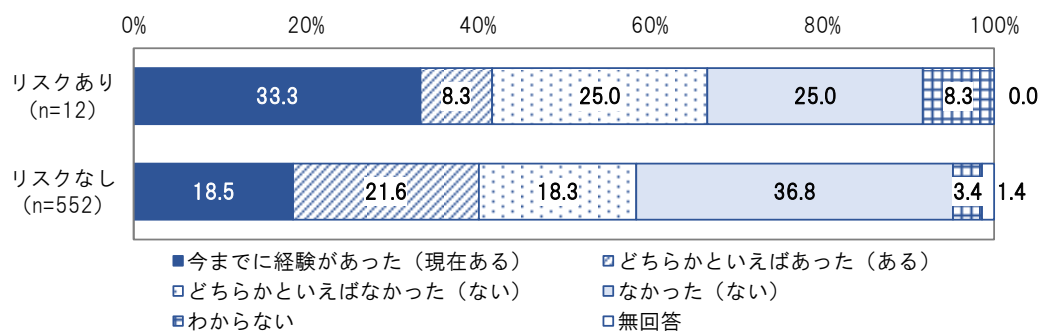
○社会・日常生活を円滑に送れなかったことの有無は、「なかった（ない）」が 36.5%と最も高く、「どちらかといえばなかった（ない）」(18.4%) と合わせた『なかった（ない）』が半数以上を占めている。

○「今までに経験があった（現在ある）」(18.8%) と「どちらかといえばあった（ある）」(21.3%) を合わせた『あった（ある）』人は約4割となっている。



《ひきこもり傾向別比較》

○ひきこもり傾向別にみると、「今までに経験があった（現在ある）」の割合が[(ひきこもりの) リスクあり]で 33.3%と、[(ひきこもりの) リスクなし] (18.5%) を大きく上回っている。

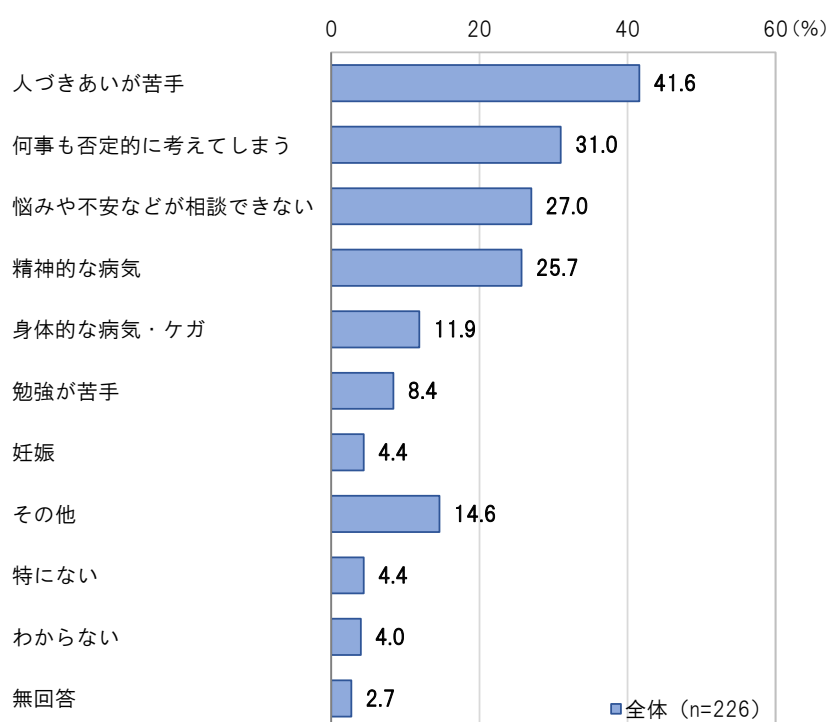


(1-1) 困難を経験した（経験している）主な原因【問 28 複数回答】

※（１）で「今までに経験があった（現在ある）」「どちらかといえばあった（ある）」と回答した人のみ

① 自分自身について

○困難を経験した（経験している）主な原因として、自分自身については、「人づきあいが苦手」が41.6%と最も高く、次いで「何事も否定的に考えてしまう」(31.0%)、「悩みや不安などが相談できない」(27.0%)、「精神的な病気」(25.7%)となっている。



《年代別比較》

○年代別にみると、すべての年代で「人づきあいが苦手」が最も高くなっている。

○また、年代が下がるにつれて「何事も否定的に考えてしまう」が高くなる傾向がみられる。

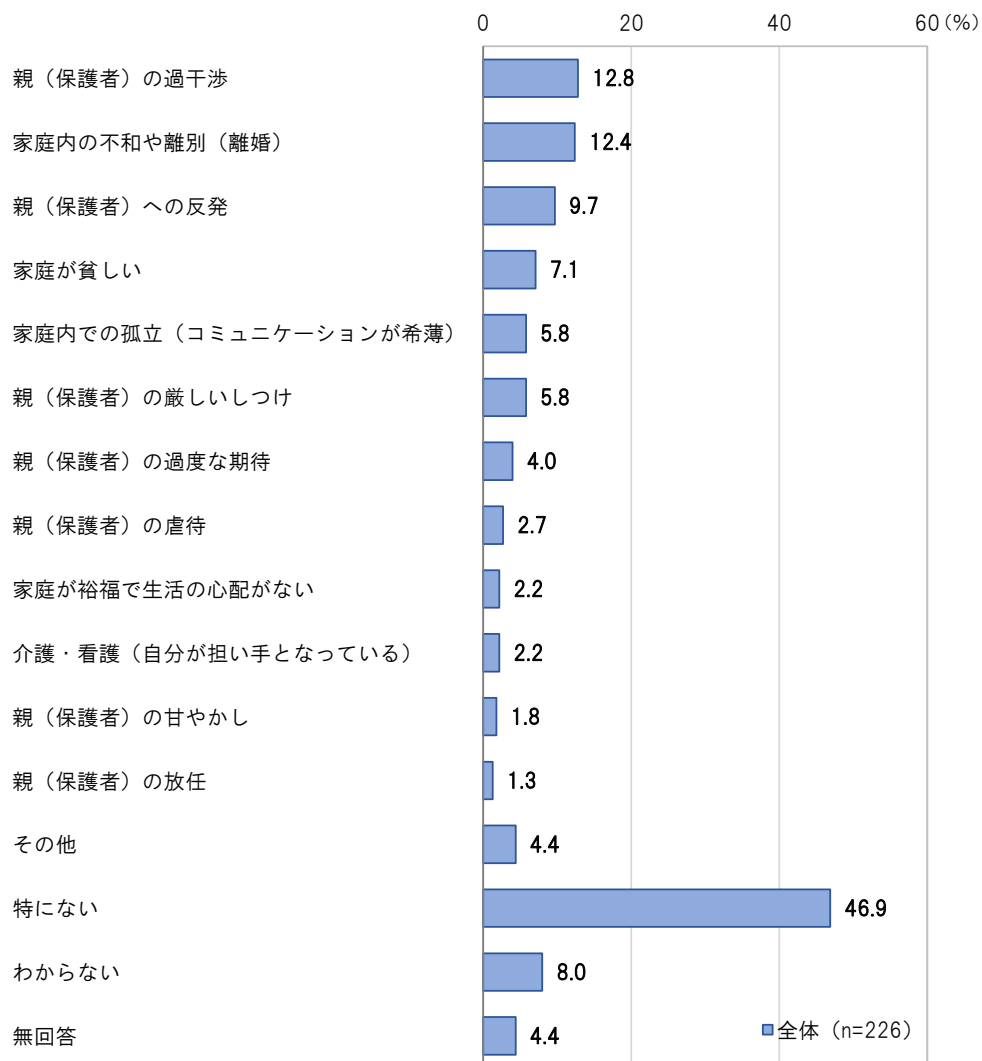
		回答者数（人）	人づきあいが苦手	何事も否定的に考えてしまう	悩みや不安などが相談できない	精神的な病気	身体的な病気・ケガ	勉強が苦手	妊娠	その他	特にない	わからない	無回答
年代別	19～24歳	31	41.9	38.7	22.6	19.4	9.7	12.9	-	16.1	-	3.2	3.2
	25～29歳	43	41.9	37.2	32.6	27.9	11.6	4.7	-	14.0	2.3	4.7	4.7
	30～34歳	63	46.0	31.7	27.0	28.6	12.7	11.1	7.9	12.7	3.2	-	1.6
	35～39歳	89	38.2	24.7	25.8	24.7	12.4	6.7	5.6	15.7	7.9	6.7	2.2

※1 番目に割合の高い回答を「太字+濃い網掛け」とし、2 番目に割合の高い回答を「薄い網掛け」としている。

② 家族・家庭について

○困難を経験した（経験している）主な原因として、家族・家庭については、「特にない」が46.9%と最も高くなっている。

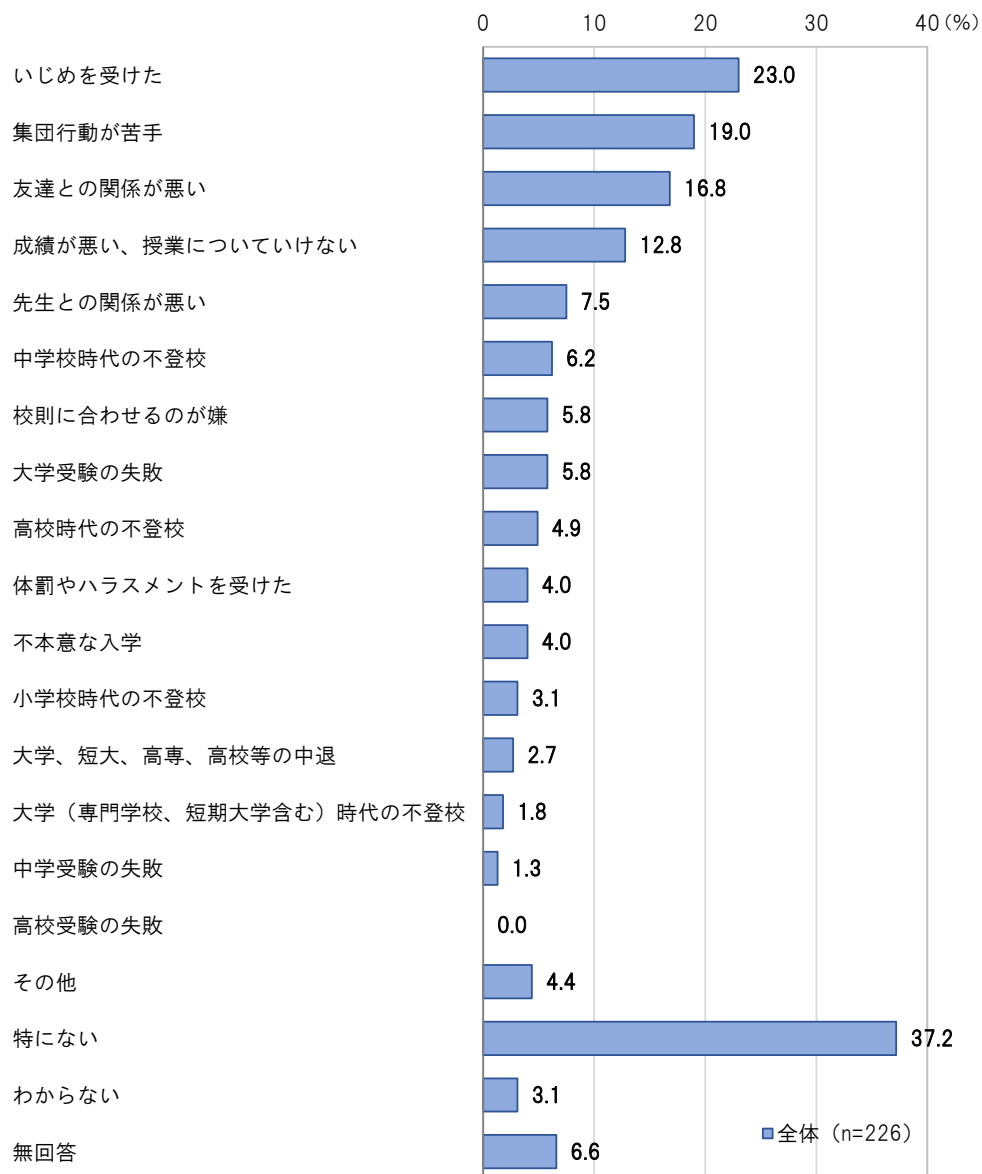
○具体的な内容では、「親（保護者）の過干渉」が12.8%と高く、次いで「家庭内の不和や離別（離婚）」（12.4%）、「親（保護者）への反発」（9.7%）となっている。



③ 学校について

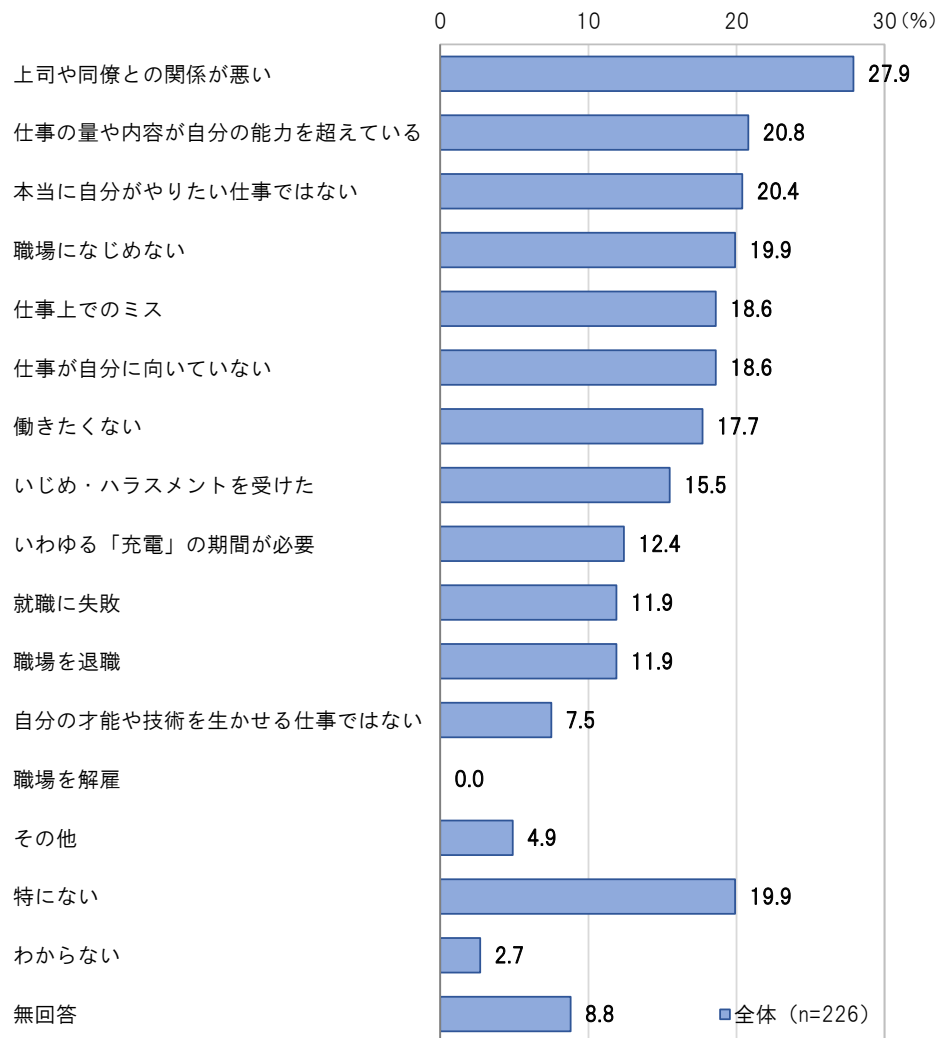
○困難を経験した（経験している）主な原因として、学校については、「特にない」が 37.2%と最も高くなっている。

○具体的な内容では、「いじめを受けた」が 23.0%と高く、次いで「集団行動が苦手」（19.0%）、「友達との関係が悪い」（16.8%）、「成績が悪い、授業についていけない」（12.8%）となっている。



④ 仕事・職場について

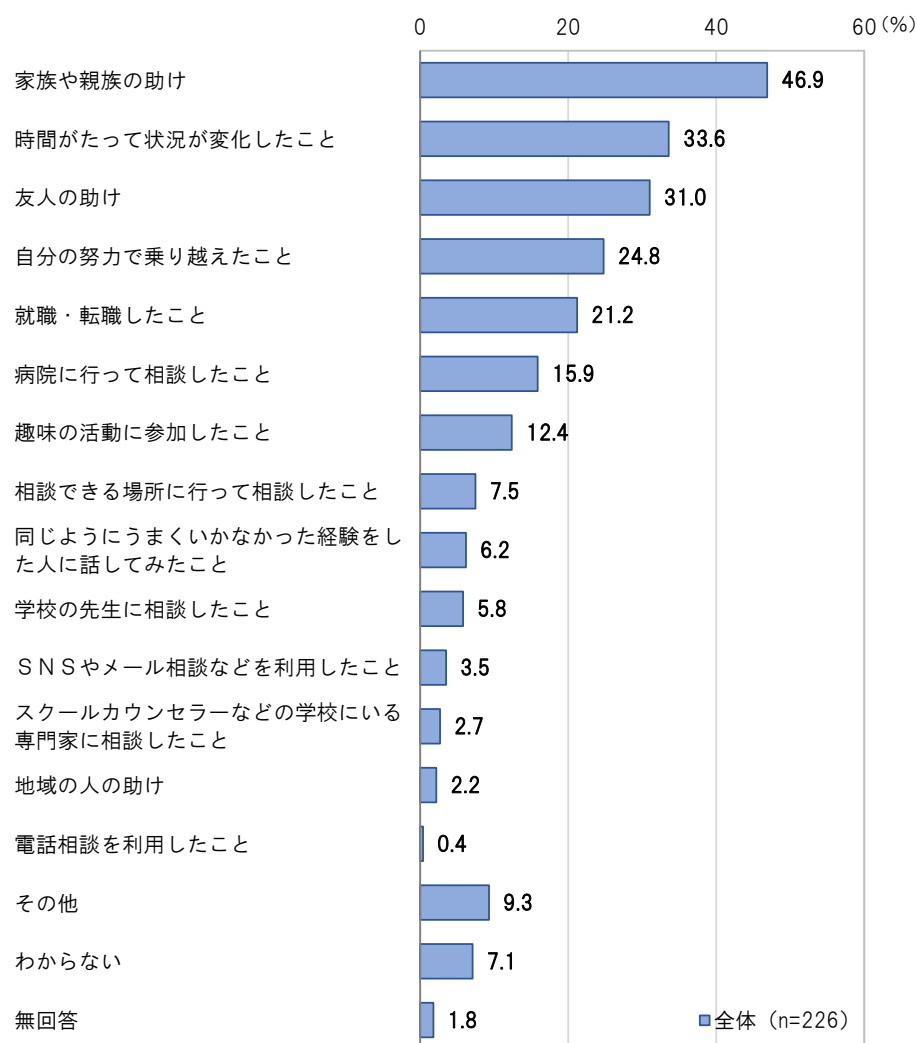
○困難を経験した（経験している）主な原因として、仕事・職場については、「上司や同僚との関係が悪い」が27.9%と最も高く、次いで「仕事の量や内容が自分の能力を超えている」（20.8%）、「本当に自分がやりたい仕事ではない」（20.4%）、「職場になじめない」（19.9%）となっている。



(1-2) 社会・日常生活を円滑に送れなかった状態が改善したきっかけ【問 28-1 複数回答】

※(1)で「今までに経験があった(現在ある)」「どちらかといえばあった(ある)」と回答した人のみ

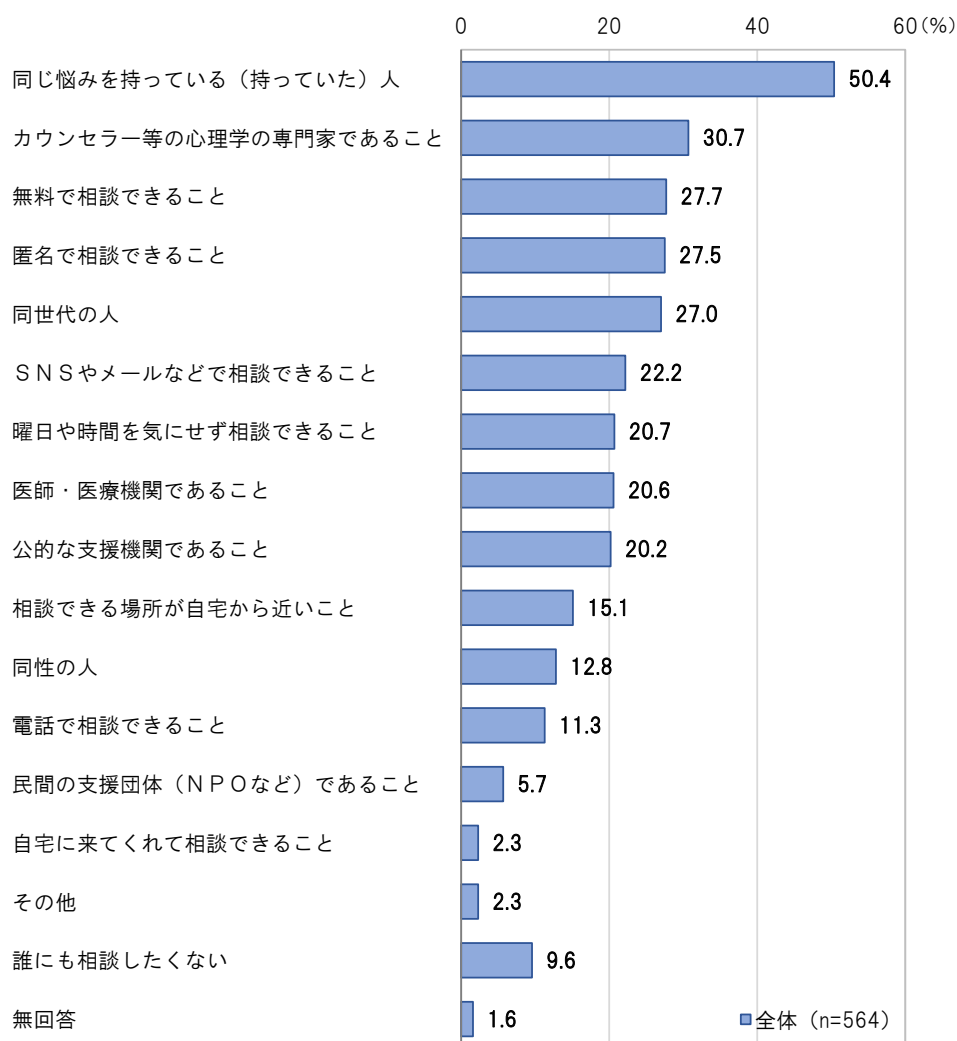
○社会・日常生活を円滑に送れなかった状態が改善したきっかけは、「家族や親族の助け」が46.9%と最も高く、次いで「時間がたって状況が変化したこと」(33.6%)、「友人の助け」(31.0%)、「自分の努力で乗り越えたこと」(24.8%)となっている。



(2) 社会・日常生活を円滑に送ることができない状態となった時に相談したい人・場所

【問 29 複数回答】

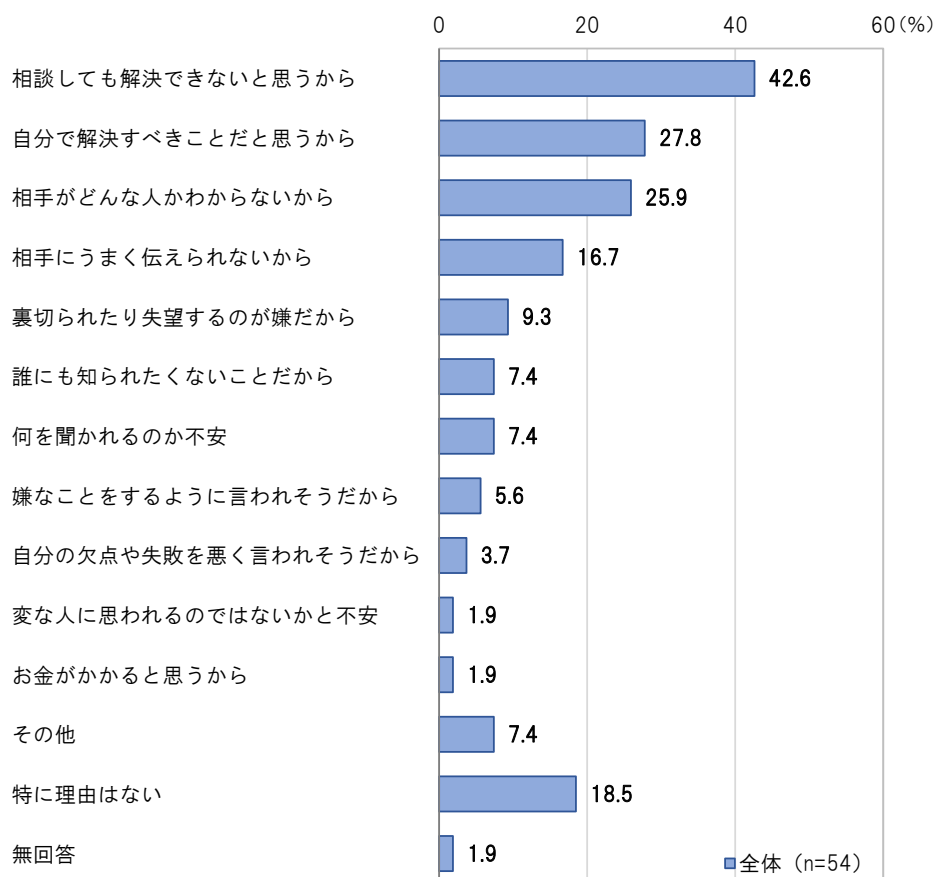
○社会・日常生活を円滑に送ることができない状態となった時に相談したい人・場所は、「同じ悩みを持っている（持っていた）人」が50.4%と最も高く、次いで「カウンセラー等の心理学の専門家であること」(30.7%)、「無料で相談できること」(27.7%)、「匿名で相談できること」(27.5%)、「同世代の人」(27.0%)となっている。



(2-1) 社会・日常生活を円滑に送ることができない状態となった時に誰にも相談したくない理由【問 29-1 複数回答】

※(2)で「誰にも相談したくない」と回答した人のみ

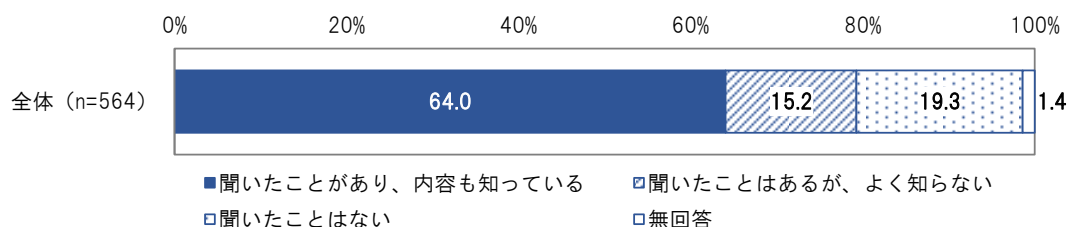
○社会・日常生活を円滑に送ることができない状態となった時に誰にも相談したくない理由は、「相談しても解決できないと思うから」が42.6%と最も高く、次いで「自分で解決すべきことだと思うから」(27.8%)、「相手がどんな人かわからないから」(25.9%)となっている。



（３）ヤングケアラーの言葉の認知度【問 30 単数回答】

○ヤングケアラーの言葉の認知度は、「聞いたことがあり、内容も知っている」が 64.0%と最も高く、「聞いたことはあるが、よく知らない」(15.2%) と合わせた『聞いたことがある』が約 8 割を占めている。

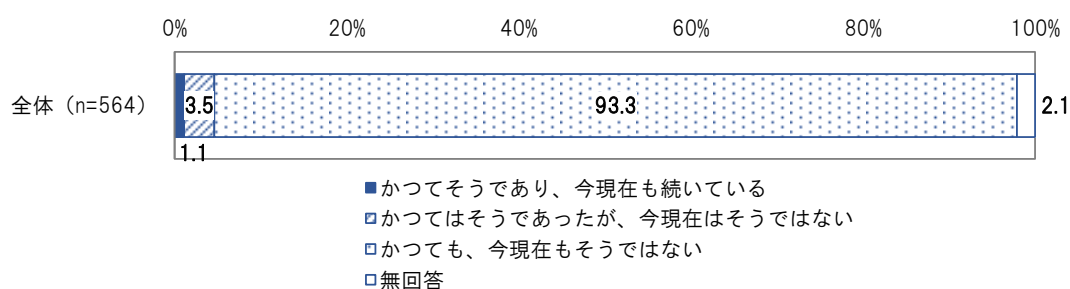
○一方で、「聞いたことはない」が 19.3%となっている。



（４）自身をヤングケアラーだったと思うか【問 31 単数回答】

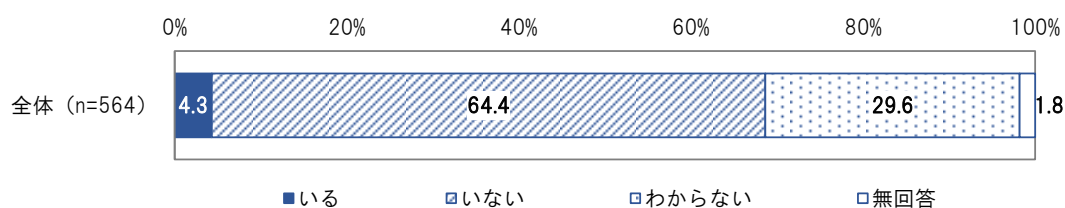
○自身をヤングケアラーだったと思うかは、「かつても、今現在もそうではない」が 93.3%と大半を占めている。

○「かつてそうであり、今現在も続いている」は 1.1%、「かつてはそうであったが、今現在はそうではない」は 3.5%となっている。



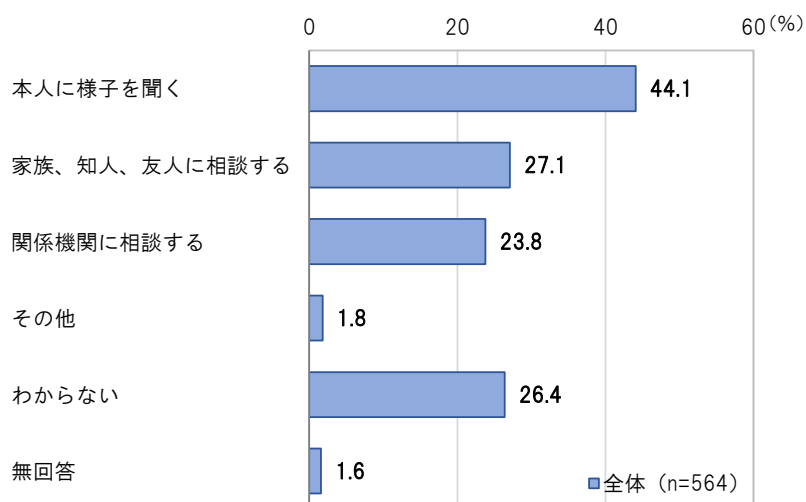
（５）自分の周りでヤングケアラーと思われるこどもがいるか【問 32 単数回答】

○自分の周りでヤングケアラーと思われるこどもがいるかは、「いない」が 64.4%と 6 割以上を占め、「いる」は 4.3%となっている。



(6) 自分の周りでヤングケアラーと思われるこどもがいた場合の対応【問 33 複数回答】

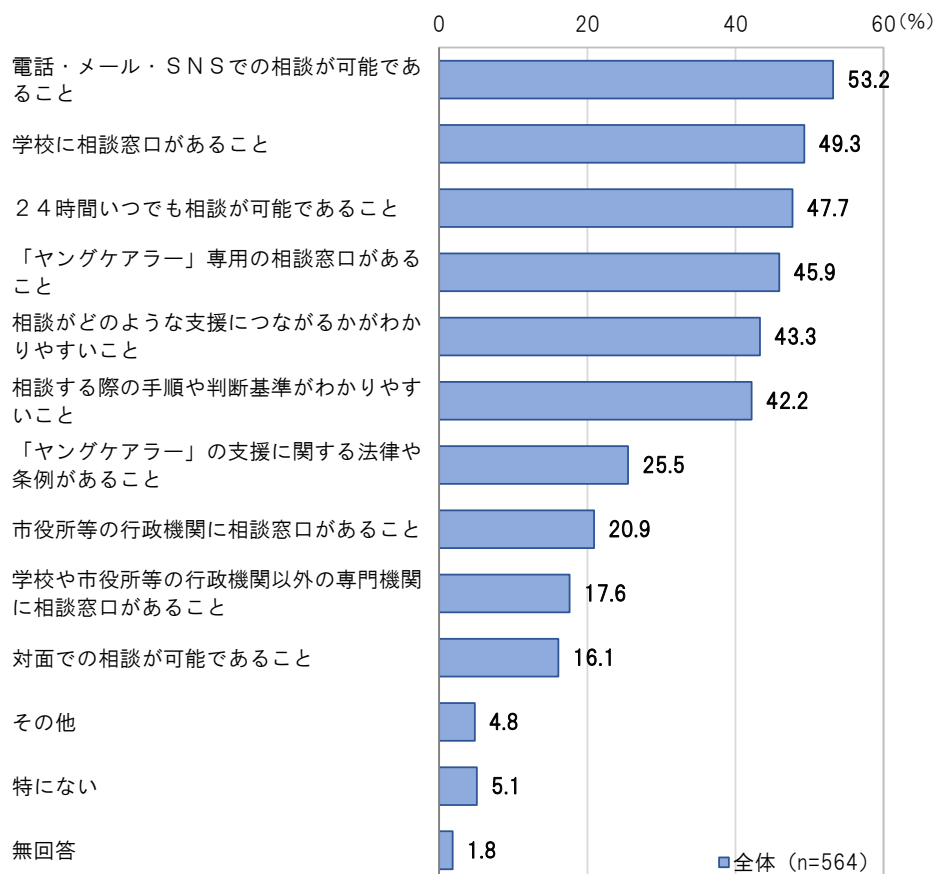
○自分の周りでヤングケアラーと思われるこどもがいた場合の対応は、「本人に様子を聞く」が44.1%と最も高く、次いで「家族、知人、友人に相談する」(27.1%)、「関係機関に相談する」(23.8%)となっている。



(7) 周りでヤングケアラーと思われるこどもがいた場合に相談しやすくなるための仕組み

【問 34 複数回答】

○周りでヤングケアラーと思われるこどもがいた場合に相談しやすくなるための仕組みは、「電話・メール・SNSでの相談が可能であること」が53.2%と最も高く、次いで「学校に相談窓口があること」(49.3%)、「24時間いつでも相談が可能であること」(47.7%)となっている。

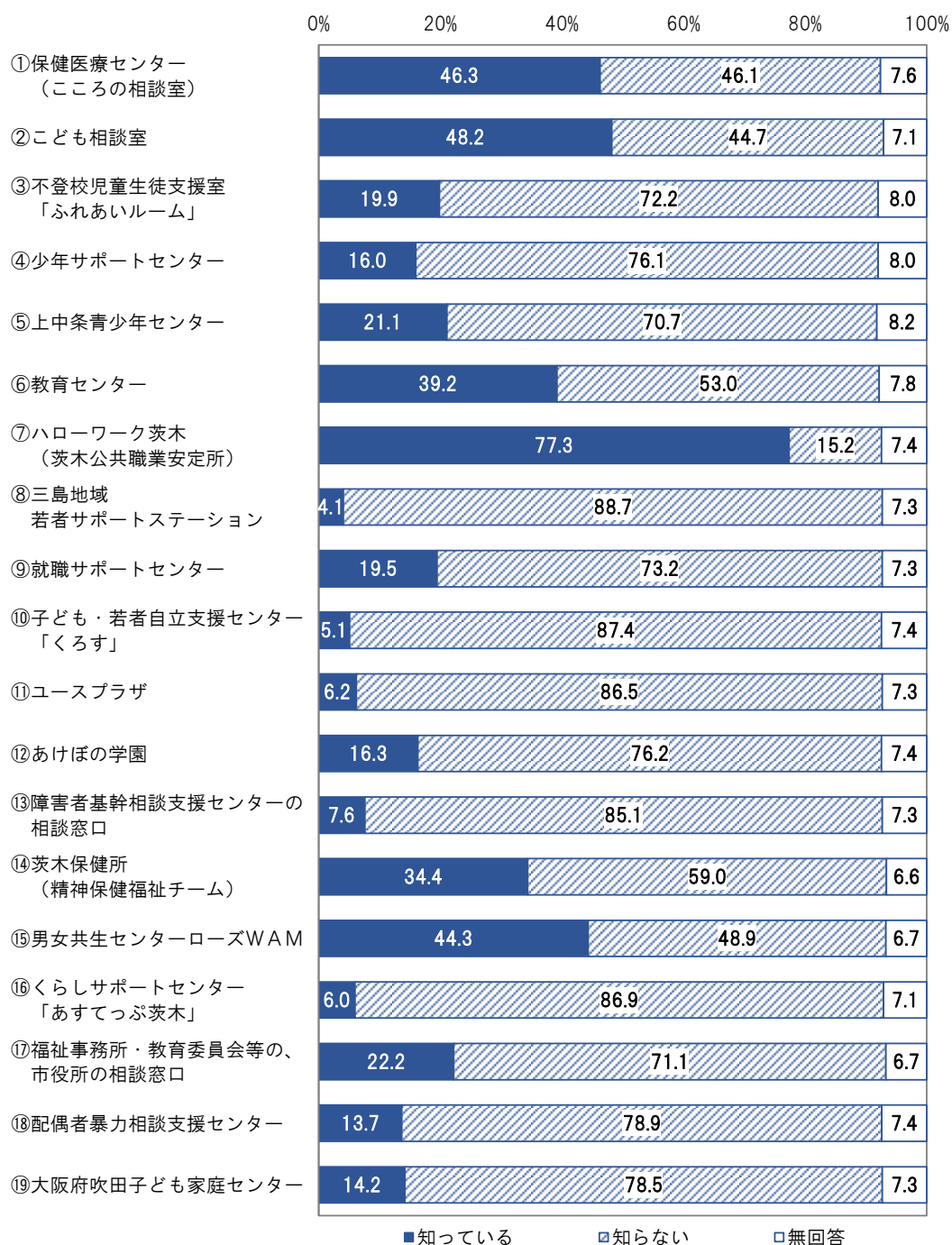


4. 相談窓口・相談機関等について

(1) 相談窓口・相談機関等の認知度【問35(1) 単数回答】

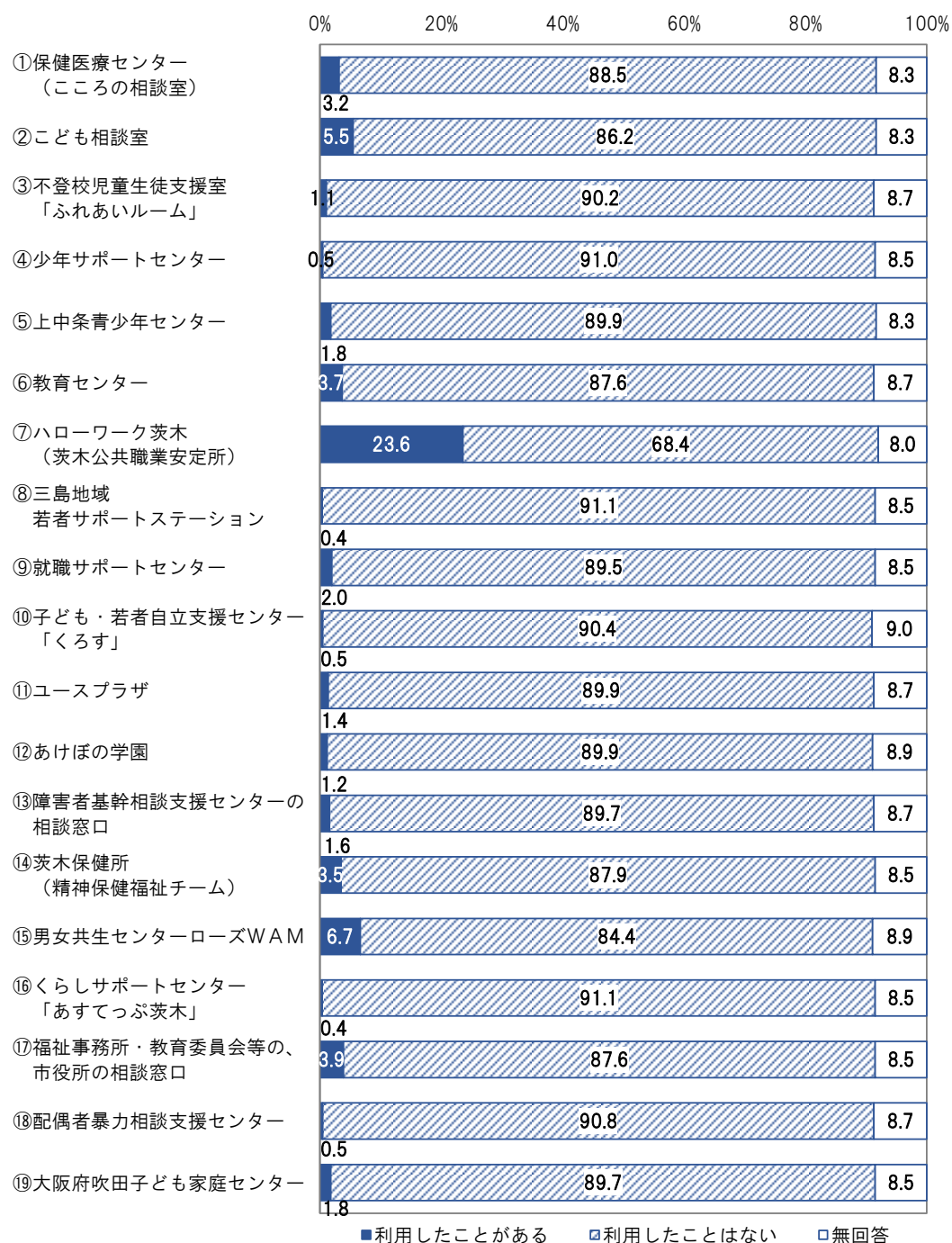
○相談窓口・相談機関等の認知度は、「知っている」の割合をみると、“⑦ハローワーク茨木（茨木公共職業安定所）”で77.3%と最も高く、次いで“②こども相談室”（48.2%）、“①保健医療センター（こころの相談室）”（46.3%）となっている。

○“⑧三島地域若者サポートステーション”、“⑩子ども・若者自立支援センター「くろす」”、“⑪ユースプラザ”、“⑬障害者基幹相談支援センターの相談窓口”、“⑯くらしサポートセンター「あすてっぷ茨木」”では、「知っている」が1割未満と低くなっている。



（２）相談窓口・相談機関等の利用状況【問 35（２） 単数回答】

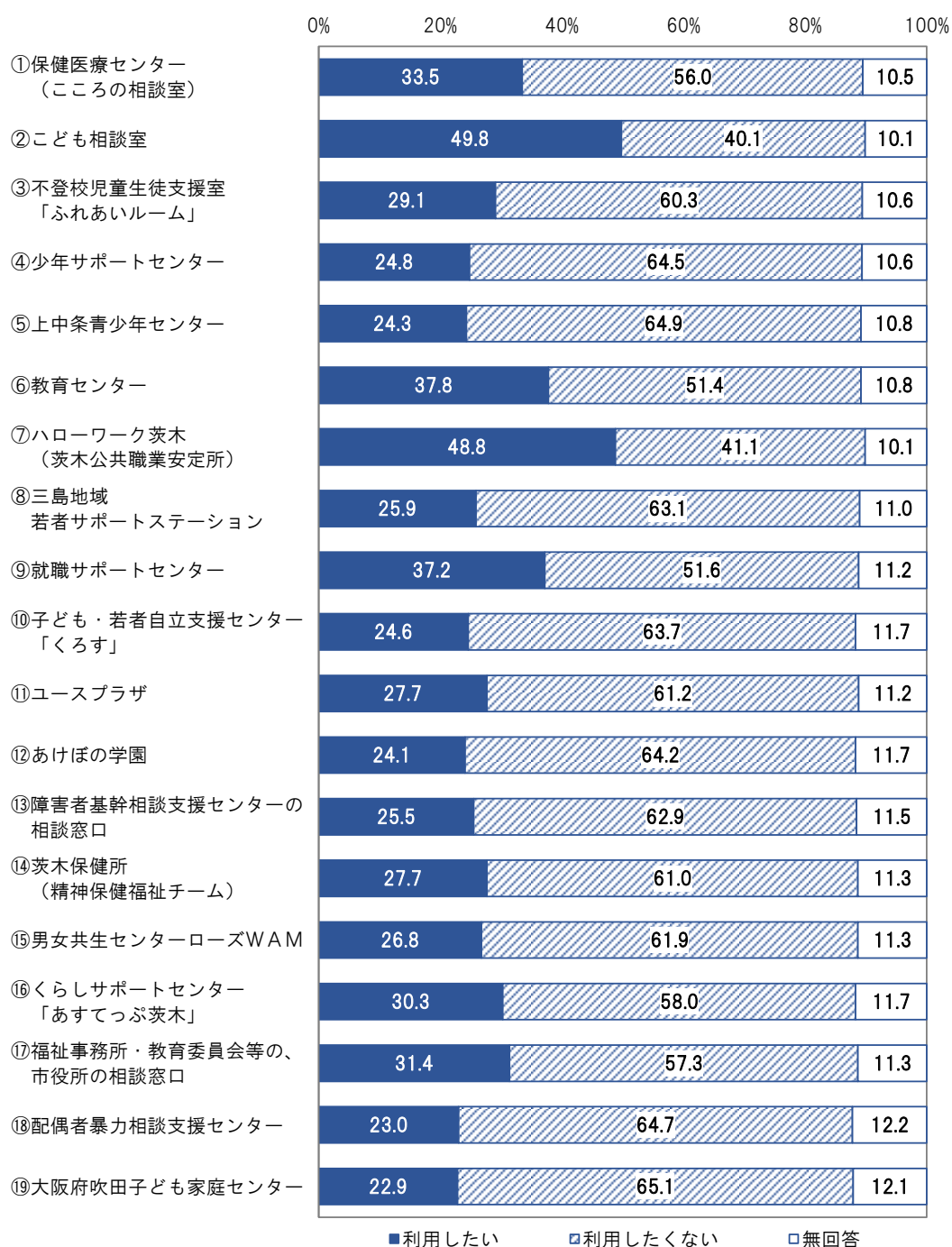
○相談窓口・相談機関等の利用状況は、「利用したことがある」の割合をみると、“⑦ハローワーク茨木（茨木公共職業安定所）”で23.6%と最も高くなっているものの、その他の機関では1割未満の利用率となっている。



(3) 相談窓口・相談機関等の今後の利用意向【問 35 (3) 単数回答】

○相談窓口・相談機関等の今後の利用意向は、「利用したい」の割合をみると、“②こども相談室”で49.8%と最も高く、次いで“⑦ハローワーク茨木（茨木公共職業安定所）”（48.8%）、“⑥教育センター”（37.8%）、“⑨就職サポートセンター”（37.2%）となっている。

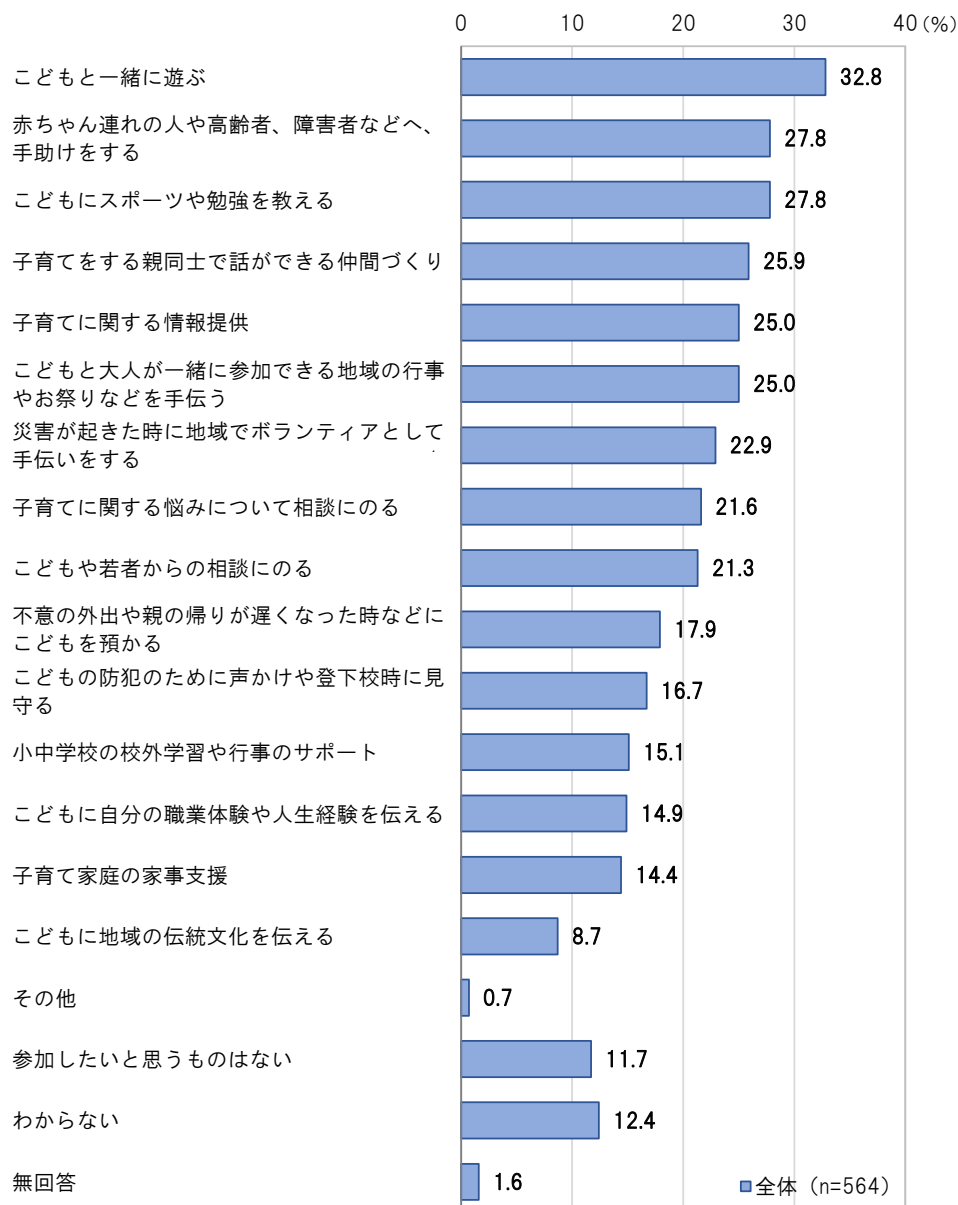
○その他の機関においても利用意向は2割以上となっており、（1）認知度や（2）利用状況と比べると、すべての事業で利用意向が高い結果となっている。



5. 地域の活動や子育てを支援する活動について

(1) 子育てに関する活動の支え手として参加したいと思うもの【問36 複数回答】

○子育てに関する活動の支え手として参加したいと思うものは、「こどもと一緒に遊ぶ」が32.8%と最も高く、次いで「赤ちゃん連れの人や高齢者、障害者などへ、手助けをする」および「こどもにスポーツや勉強を教える」(27.8%)、「子育てをする親同士で話ができる仲間づくり」(25.9%)となっている。



《性別・年代別比較》

○性別にみると、[女性]では「こどもと一緒に遊ぶ」、[男性]では「こどもにスポーツや勉強を教える」が最も高くなっている。また、[女性]では「赤ちゃん連れの人や高齢者、障害者などへ、手助けをする」や「子育てに関する情報提供」、「不意の外出や親の帰りが遅くなった時などにこどもを預かる」で、[男性]に比べて10ポイント以上高い割合となっている。

○年代別にみると、年代が下がるにつれて「こどもと一緒に遊ぶ」や「こどもにスポーツや勉強を教える」、年代が上がるにつれて「赤ちゃん連れの人や高齢者、障害者などへ、手助けをする」が高くなる傾向がみられる。

(%)

		回答者数(人)	こどもと一緒に遊ぶ	赤ちゃん連れの人や高齢者、障害者などへ、手助けをする	こどもにスポーツや勉強を教える	子育てをする親同士で話ができる仲間づくり	子育てに関する情報提供	こどもと大人が一緒に参加できる地域の行事やお祭りなどを手伝う	災害が起きた時に地域でボランティアとして手伝いをする	子育てに関する悩みについて相談にのる	子どもや若者からの相談にのる	不意の外出や親の帰りが遅くなった時などにこどもを預かる
性別	女性	351	35.0	34.2	24.2	26.5	29.3	27.9	23.9	25.1	21.1	23.9
	男性	207	29.5	17.4	33.8	25.1	17.9	20.3	21.3	16.4	21.7	7.7
年代別	19～24歳	91	40.7	20.9	38.5	17.6	16.5	28.6	23.1	14.3	18.7	9.9
	25～29歳	109	33.9	23.9	28.4	24.8	25.7	17.4	25.7	18.3	24.8	19.3
	30～34歳	168	33.9	29.8	26.2	32.1	30.4	23.8	22.0	25.0	22.6	21.4
	35～39歳	195	27.7	31.8	23.6	25.1	24.1	28.7	22.1	24.1	19.5	17.9

	(つづき)	回答者数(人)	こどもの防犯のために声掛けや登下校時に見守る	小中学校の校外学習や行事のサポート	こどもに自分の職業体験や人生経験を伝える	子育て家庭の家事支援	こどもに地域の伝統文化を伝える	その他	参加したいと思うものはない	わからない	無回答
性別	女性	351	20.2	17.4	14.2	17.4	8.3	1.1	10.3	12.3	1.4
	男性	207	10.6	11.1	15.9	9.2	9.2	-	14.5	11.6	1.4
年代別	19～24歳	91	13.2	19.8	15.4	5.5	13.2	1.1	17.6	11.0	2.2
	25～29歳	109	17.4	13.8	14.7	15.6	5.5	-	14.7	11.9	3.7
	30～34歳	168	14.9	13.1	12.5	14.9	6.5	0.6	7.1	16.1	-
	35～39歳	195	19.5	15.4	16.9	17.4	10.3	1.0	11.3	10.3	1.5

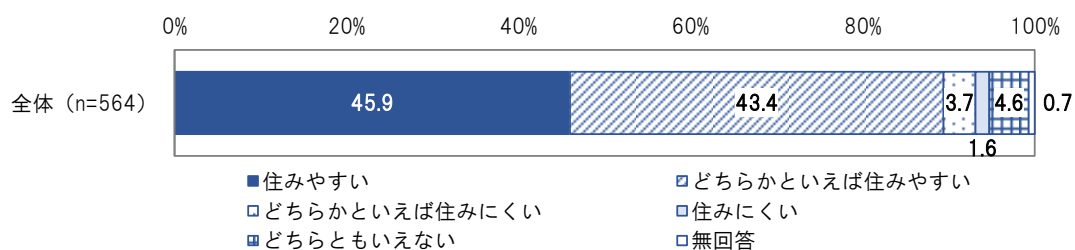
※1番目に割合の高い回答を「太字+濃い網掛け」とし、2番目に割合の高い回答を「薄い網掛け」としている。

6. 茨木市での暮らしや意見について

(1) 茨木市の住みやすさの評価【問 37 単数回答】

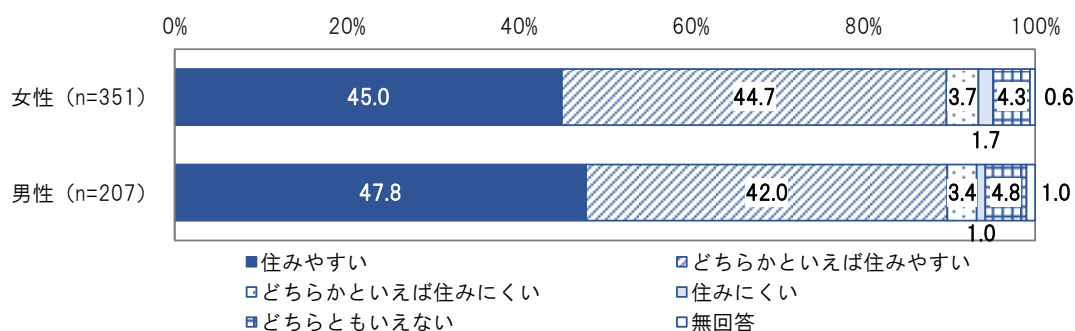
○茨木市の住みやすさの評価は、「住みやすい」が45.9%と最も高く、「どちらかといえば住みやすい」(43.4%)と合わせた『住みやすい』が9割近くを占めている。

○「どちらかといえば住みにくい」(3.7%)と「住みにくい」(1.6%)を合わせた『住みにくい』人は5.3%となっている。



《性別比較》

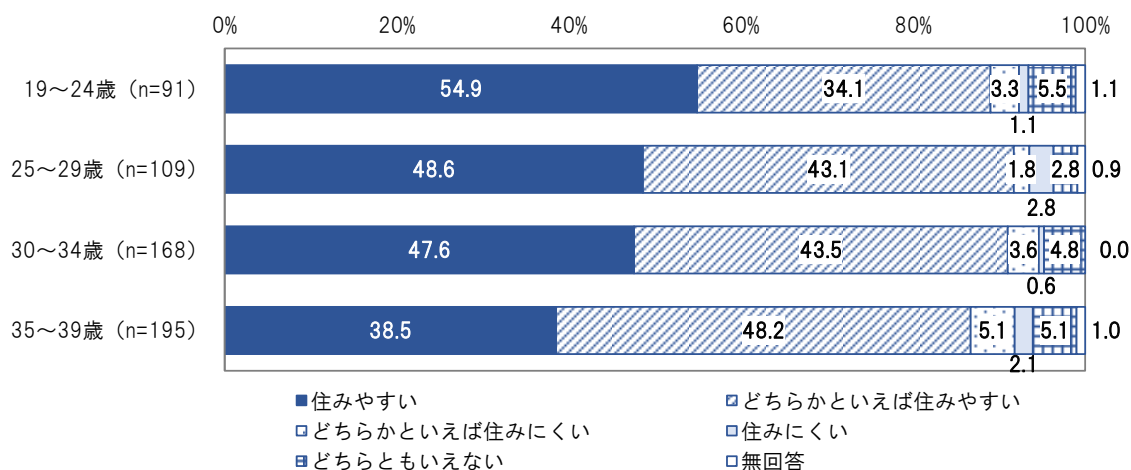
○性別による大きな差異はみられない。



《年代別比較》

○年代別にみると、年代が下がるにつれて「住みやすい」が高くなる傾向がみられる。

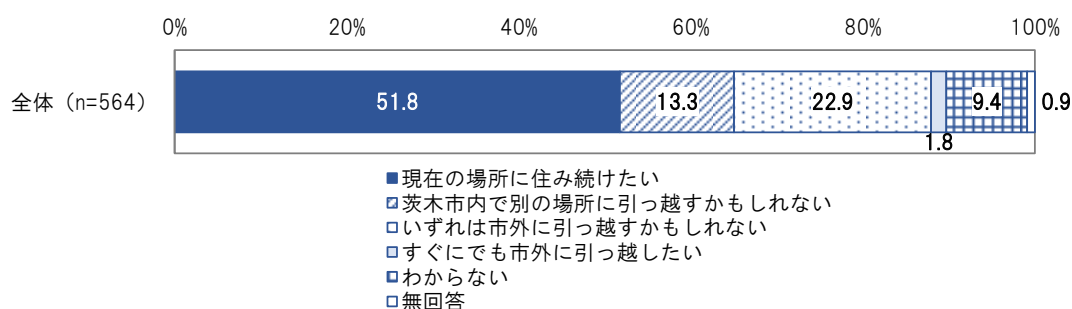
○「どちらかといえば住みにくい」と「住みにくい」を合わせた『住みにくい』の割合は、[35～39歳]で7.2%となっており、その他の年代に比べてやや高くなっている。



(2) 現在の居住場所での今後の居住意向【問 38 単数回答】

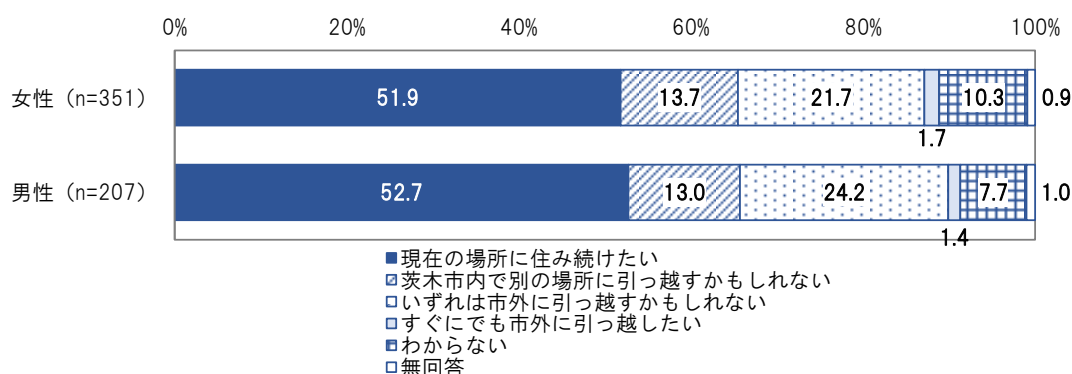
○現在の居住場所での今後の居住意向は、「現在の場所に住み続けたい」が51.8%と最も高く、「茨木市内で別の場所に引っ越すかもしれない」(13.3%)と合わせた『茨木市に住み続けたい』が6割以上を占めている。

○「いずれは市外に引っ越すかもしれない」(22.9%)と「すぐにでも市外に引っ越したい」(1.8%)を合わせた『市外に引っ越したい』人は2割以上となっている。



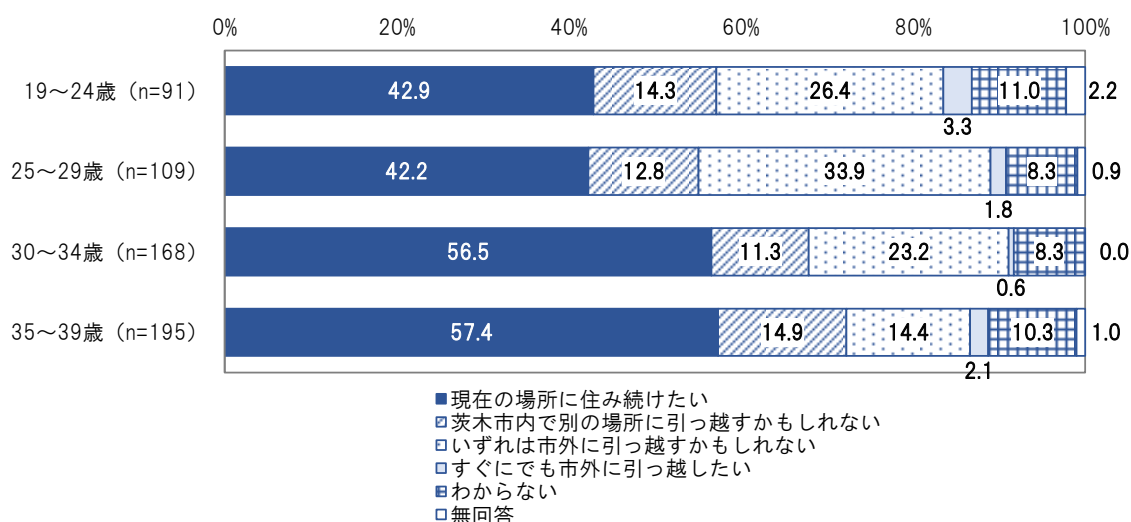
《性別比較》

○性別による大きな差異はみられない。



《年代別比較》

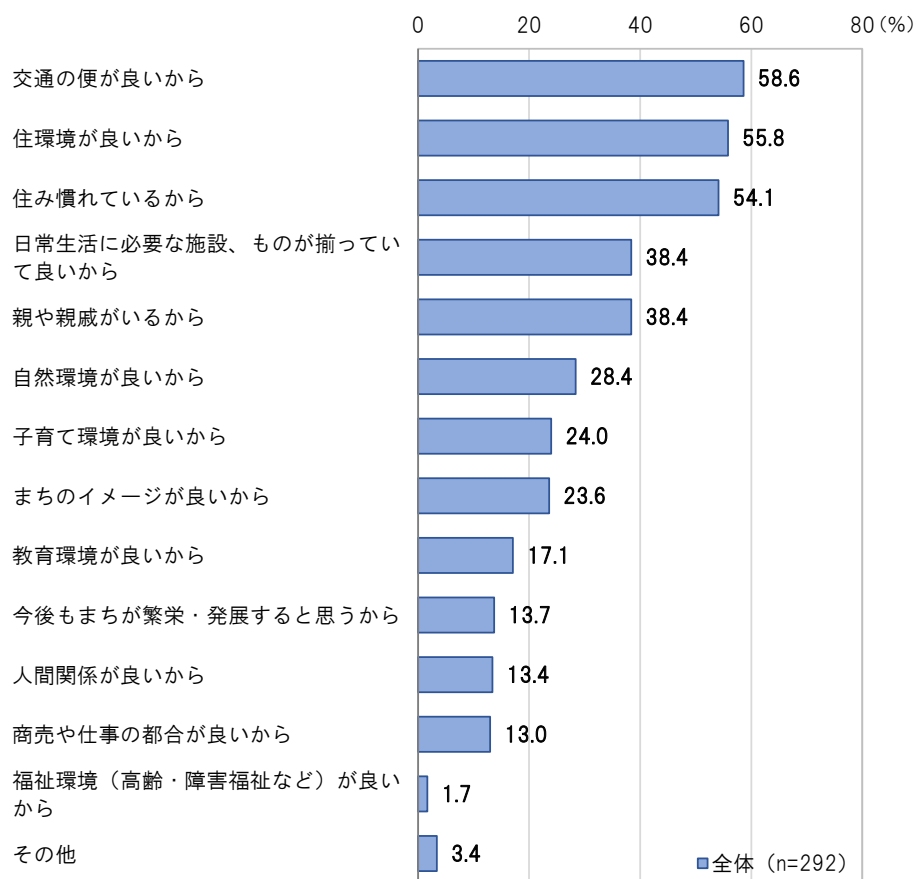
○年代別にみると、年代が上がるにつれて「現在の場所に住み続けたい」が高くなる傾向がみられる。また、[25～29歳]で『市外に引っ越したい』が3割を超えて高くなっている。



（２－１）茨木市内に住み続けたい理由【問 38-1 複数回答】

※（２）で「現在の場所に住み続けたい」と回答した人のみ

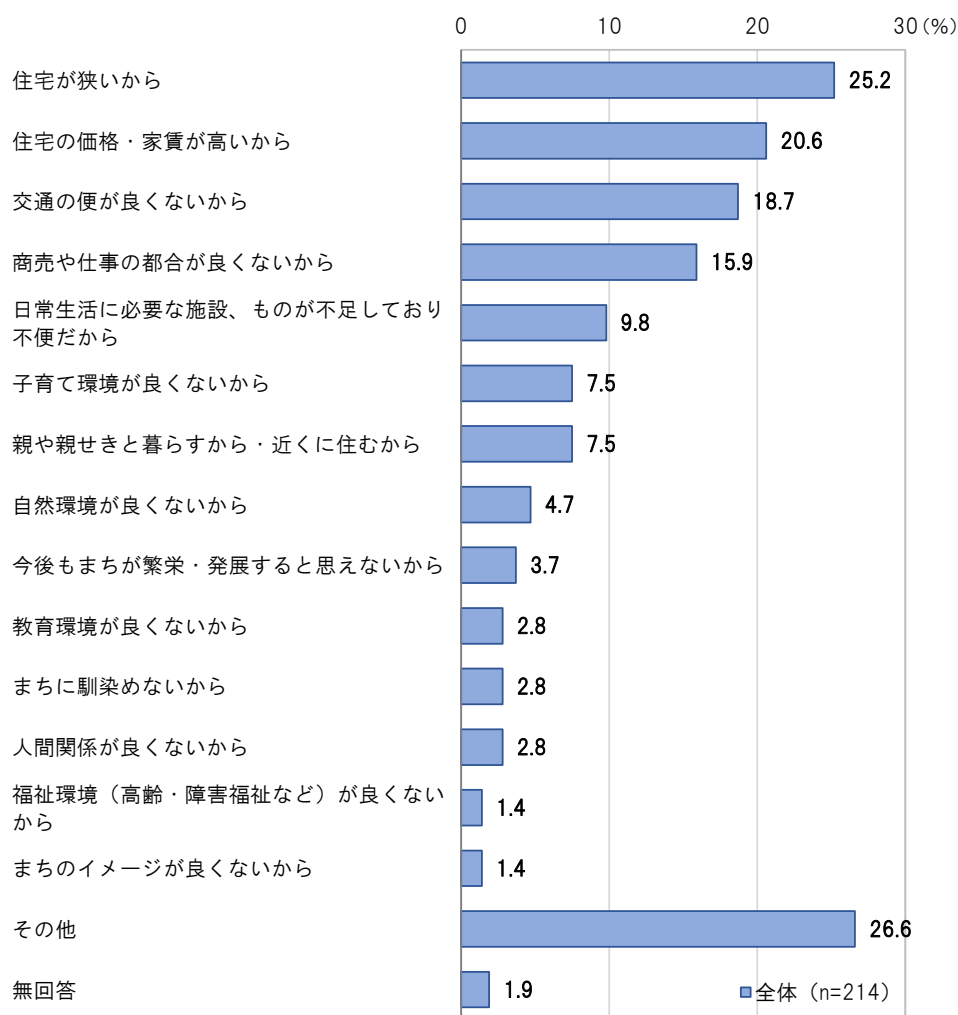
○茨木市内に住み続けたい理由は、「交通の便が良いから」が 58.6%と最も高く、次いで「住環境が良いから」(55.8%)、「住み慣れているから」(54.1%)となっている。



（２－２）別の場所や市外に引っ越すかもしれない理由【問 38-2 複数回答】

※（２）で「茨木市内で別の場所に引っ越すかもしれない」「いずれは市外に引っ越すかもしれない」「すぐにでも市外に引っ越したい」のいずれかを回答した人のみ

○別の場所や市外に引っ越すかもしれない理由は、「住宅が狭いから」が 25.2%と最も高く、次いで「住宅の価格・家賃が高いから」（20.6%）、「交通の便が良くないから」（18.7%）となっている。



Ⅲ 調査結果からみえてきた今後の課題

1. 相談窓口・相談機関の周知

本市では、さまざまな相談窓口や相談機関が設置されているものの、認知度では「ハローワーク茨木（茨木公共職業安定所）」（77.3%）、「こども相談室」（48.2%）、「保健医療センター（こころの相談室）」（46.3%）では高くなっているものの、多くの相談機関を知らない人が多い状況にある。一方で、今後の利用意向ではすべての相談窓口・相談機関で2割以上の意向となっていることから、相談ニーズに応じて適切な窓口につながるよう、各相談窓口・相談機関で受けている相談内容や解説時間・相談方法等を含め、わかりやすく周知することが必要である。

2. 多様な相談方法・相談機能の充実

社会・日常生活を円滑に送ることができない状態となった時に相談したい人・場所として、「同じ悩みを持っている（持っていた）人」（50.4%）、「カウンセラー等の心理学の専門家であること」（30.7%）、「無料で相談できること」（27.7%）、「匿名で相談できること」（27.5%）、「同世代の人」（27.0%）などで高い割合となっている。また、誰にも相談したくない理由では「相談しても解決できないと思うから」（42.6%）や「相手がどんな人かわからないから」（25.9%）となっており、専門家による専門的な相談窓口だけでなく、同じような悩みを持つ人同士が支え合うピアカウンセリング、匿名による電話やSNS等を通じた相談などが望まれている。

福祉や支援の介入が必要な事柄の場合、当事者や周囲からの相談が大きな第一歩となることから、さまざまな手法や媒体を用いて多様な相談の場や機会を設けることが必要である。

3. ヤングケアラー支援を進めるための相談機能の充実

ヤングケアラーについて、「聞いたことがあり、内容も知っている」と「聞いたことはあるが、よく知らない」を合わせた『聞いたことがある』が約8割を占め、言葉の認知は進んでいる反面、自分の周りでヤングケアラーと思われるこどもは「いない」と回答した人が6割以上を占めている。

自身も周囲もこどもがいない層が多いことも考えられますが、ヤングケアラーの支援に向けては周りの人が気付くことから始まるものであることから、ヤングケアラーに対する正しい知識の普及が必要である。

また、周りでヤングケアラーと思われるこどもがいた場合に相談しやすくなるためには、「電話・メール・SNSでの相談が可能であること」（53.2%）、「学校に相談窓口があること」（49.3%）、「24時間いつでも相談が可能であること」（47.7%）などが高くなっており、曜日や時間を気にせずに相談ができることや毎日の通学先（学校）で相談できることが必要である。加えて、上位項目以外でも「相談がどのような支援につながるかがわかりやすいこと」や「相談する際の手順や判断基準がわかりやすいこと」も4割を超えて高くなっており、相談するきっかけをつくるためには、相談から支援への流れなどの「見える化」を行っていく必要がある。

4. ひきこもりの長期化を防ぐための包括的な支援の充実

ひきこもりリスクのある人では2.1%と、前回調査（1.6%）に比べて微増している。年代別に見ると「35～39歳」で高く、ひきこもりの状態になってからの期間が『10年以上』の方も約1割となっており、ひきこもりの長期化・高齢化が進んでいることが考えられる。

また、調査結果では、ひきこもり状態になった年齢は、20歳代後半以降で高く、そのきっかけとして妊娠や退職が多くなっているものの、次いで、新型コロナウイルス感染症の流行をきっかけとしている人も多くみられた。感染症の拡大をきっかけとして、テレワークやオンライン授業の推進が進んだ一方で、外出や活動の自粛等により社会とのつながりに変化があったことが考えられる。

ひきこもりの初期段階から学校関係者や地域の支援者、行政機関等が包括的に関わり、社会との関係を維持できる支援体制の充実が必要である。

5. 孤独・孤立を解消する居場所の確保・提供

孤立・孤独について、「自分には人とのつきあいがないと感じることがある」と感じている人が半数以上を占めており、「孤独である」と感じることがある人も半数以上を占めている。

また、地域の人とのかかわりを持っている人が少ない状況がみられた一方で、社会のために役立つことをしたいと思う人が8割以上を占めている。地域で子育てに関する活動の支え手として参加したいと思うものは、「こどもと一緒に遊ぶ」（32.8%）、「赤ちゃん連れの人や高齢者、障害者などへ、手助けをする」と「こどもにスポーツや勉強を教える」（27.8%）、「子育てをする親同士で話ができる仲間づくり」（25.9%）等が高くなっている。地域等におけるこどもとのふれあいなど、多世代交流を通じて社会性や他者への思いやりを育むとともに、孤独・孤立を防ぐための支援策を充実していく必要がある。